

プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(4)

Poerbatjaraka's Kepustakaan Djawa (4)

青山 亨 Toru AOYAMA

東京外国語大学総合国際学研究院

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

増井美佳 Mika MASUI

東京外国語大学言語文化学部インドネシア専攻 2013 年度卒業生
訳

訳者まえがき

本稿は、『東京外大東南アジア学』第20巻(2015年)、第21巻(2016年)、第22巻(2017年)に掲載された「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』」の第1編、第2編、第3編の続編である。プルボチャロコ(Raden Mas Ngabei Poerbatjaraka)が1952年に出版したインドネシア語版『クプスタカアン・ジャワ』(Kepustakaan Djawa)を底本とし、同じくジャワ語版『カプスタカン・ジャウイ』(Kapustakan Djawi)を適宜参照して、日本語訳を作成したものである。インドネシア人のためのジャワ文学史概説という原書の性格を考慮し、日本語訳作成にあたっては、原書を全訳した上で、日本の読者に必要と思われる最低限の説明を訳註で補っている。翻訳の経緯や原書および著者については第1編の「訳者まえがき」を参照していただきたい。

第4編である本稿では、原書の第6章「イスラームの時代」を訳出した。本編の収録作品は14点である。これらはジャワ語文学のなかでイスラームの影響を受けた最初期の作品であり、その成立時期は16世紀から18世紀初である。政治史的には、ドゥマック王国の時代からマタラム王国のカルタスラ時代の中頃までに相当する。言語的には、初期の作品は中期ジャワ語で書かれているが、17世紀末に近づくと現代ジャワ語とみなせる言語による作品が出現している(本章第55番『セワカ』の解説を参照)。原書の残り24点を対象とする最終章の第7章「初期スラカルタ時代」については、引き続き公表する予定である。



この時期を含むジャワ語文献全般については Pigeaud (1967–70) と Uhlenbeck (1964) が参考になる。インドネシア語によるジャワ文学の概説として Edi Sedyawati et al. (2001) がある。また、スルックにおけるイスラーム神秘主義の研究については Zoetmulder (1994) が古典的研究である。

なお、原書のジャワ語版は Sastra Jawa: Program Digitalisasi Sastra Daerah のサイトで電子版が提供されている。本稿でもジャワ語版の確認はこのサイトのテキストに依拠した⁽¹⁾。

訳文について

1. ジャワ語およびインドネシア語のラテン文字表記について、原書では旧綴りが使われているが、本稿では現行の新綴りに統一した。ただし、旧綴りで刊行された出版物の題名や著者名などはそのままにした（例えば、本書の表記は、新綴りでは Purbacaraka 著 *Perpustakaan Jawa* となるが、旧綴りのままにした）。
2. 第6章の作品のうち初期のものは中期ジャワ語で、それ以降のものは現代ジャワ語で書かれている。いずれもラテン文字表記については、原則として現代ジャワ語の標準的なラテン文字表記方式に準じている。カタカナ表記にあたって、母音の長短は区別せず一律に短母音で表した。e と è は「エ」で表した。曖昧母音（シュワ）を表す ě は小さな「ウ」もしくはウ段の音で表記した（例えば、tĕmbang 「トゥンバン」、sĕkar 「スカル」）。なお、dh と th は、古ジャワ語の表記では有気音を表すが、現代ジャワ語の表記では反舌音を表すことに注意が必要である。カタカナ表記にあたって dh と th を歯音の d と t と区別することはしなかった。
3. 現代ジャワ語のカタカナ表記については、原則として現代ジャワ語の発音に従った。標準的な現代ジャワ語では、語末の開音節の a は /o/ と発音され、さらに、語末から2番目の音節も開音節の a である場合、その a も /o/ と発音される（例えば、Poerbatjaraka は poerba と tjaraka の複合語なので、それぞれこの規則が適用されて Poerbotjaroko と発音されるため、「プルボチャロコ」とカタカナ表記される）。本稿では、近現代の人名や地名は慣用に従って現代ジャワ語の発音で表記した。
4. 古ジャワ語の名称と現代ジャワ語の（とくにワヤンにおける）名称が異なる場合でも、統一はせず、文脈で使い分けた。代表例として以下の地名と人名がある：スメー

ルSumeruとスメルSumeru、ラーマRāmaとラマRama、シーターSītāとシンタSinta、クリシュナKṛṣṇaとクルスナKṛēsna（それぞれ古ジャワ語と現代ジャワ語）。ただし、ラマをロモと表記することなどは原則として行わなかった。

5. 原註と訳註を区別するため、原註については註の冒頭で《原註》と表記した。
6. 簡単な訳註については、文の流れを損なわないよう、訳文自体に補足したり、丸括弧で挿入したりした場合もある。
7. 原書の中では、作品の作成年代がサカ暦で表示されているものがある。サカ暦はインド起源の太陰太陽暦である。サカ暦の年号に78を加えたものが西暦の年号に対応する。イスラーム化する以前のジャワの宮廷で使われており（ヒンドゥー・ジャワ暦）、バリ島では現在も西暦と併用されている。イスラーム化したジャワでは、1633年にマタラム王国のスルタン・アグンがジャワの暦をサカ暦から純太陰暦であるヒジュラ暦に基づく暦（イスラーム・ジャワ暦）に変更した。この年のジャワ暦1555年元日はヒジュラ暦1043年元日にあたる。

本稿で訳出した原書の章とその中で取り扱われるテキスト

第6章	イスラームの時代
47	ボナンの書
48	16世紀のジャワの文献
49	スルック・スカルサ
50	コジャ・ジャジャハン
51	スルック・ウジル
52	スルック・マラン・スミラン
53	ニティスルティ
54	ニティプラジャ
55	セワカ
56	メナック
57	ルンガニス
58	マニック・マヤ
59	アンビヤ（預言者たちの書）
60	カンダ

関連年表（16世紀～18世紀初の中部ジャワのイスラーム王国）

1508–1518年頃 ドゥマックのトルンガナ王の在位。

- 1521 年頃 ドゥマックのトルンガナ王が 2 度目の即位。
- 1527 年頃 ドゥマックが東部ジャワのクディリにあったヒンドゥー・ジャワ王国（マジャパヒトもしくはその後継国）を倒す。
- 1530 年代頃 ドゥマックの家臣ジャカ・ティンキルがパジャンに封じられる。
- 1546 年頃 ドゥマックのトルンガナ死去。その後、ジャカ・ティンキルはパジャンで勢力を拡大。
- 1570 年代頃 パジャンの家臣パマナハンがマタラムに封じられ、キャイ・グデ・パマナハンを称する。
- 1581 年頃 ジャカ・ティンキルがパジャン国王に即位。
- 1584 年頃 マタラムのキャイ・グデ・パマナハン死去。セナパティがマタラム国王に即位。
- 1587 年頃 マタラムがパジャンを攻撃し、ジャカ・ティンキルが死去。
- 1601 年頃 マタラムのセナパティが死去。パヌムバハン・セダ・クラピャックがマタラム国王に即位。
- 1613 年 マタラムのクラピャックが死去。スルタン・アグンがマタラム国王に即位（この時点でスルタン称号はもたないが通称に従う）。
- 1614 年 マタラムがカルタに遷都。
- 1625 年 マタラムがスラバヤを征服。
- 1629 年 マタラムがオランダ東インド会社の拠点バタビアを攻撃するが、失敗し撤退。
- 1633 年 スルタン・アグンが、ジャワの暦を改暦。
- 1641 年 スルタン・アグンがスルトンの称号をメッカから認められる。
- 1646 年 スルタン・アグンが死去。アマンクラットがマタラム国王に即位（マンクラット 1 世、在位 1677 年まで）。
- 1647 年 マタラムがプレレッドに遷都。
- 1674–1681 年 トルナジャヤの反乱。
- 1677 年 マンクラット 2 世がマタラム国王に即位（在位 1703 年まで）。
- 1680 年 マタラムがカルタスラに遷都（旧パジャンの地。スラカルタに遷都する 1745 年までマタラムの都。）。
- 1686–1703 年 スラパティの反乱。
- 1703 年 マンクラット 3 世がマタラム国王に即位（マンクラット 2 世の子、在位 1708 年まで）。
- 1704 年 オランダ東インド会社に支援されたパク・ブウォノ 1 世（幼名プグル、マンクラット 2 世の弟、マンクラット 3 世の叔父）がマタラム国王に即位（在位 1719 年まで）。第 1 次ジャワ継承戦争が勃発し、敗れたマンクラット 3 世は 1708 年にスリランカに流刑。

第6章 イスラームの時代

マジャパヒト王国がジャワにおいて最盛期にあるときにも、すでに外来のイスラーム教徒が少数ながら存在した。次第にイスラーム教徒の人口は増えたが、当初の彼らの居住地は、海岸部の商業都市、例えば、トゥバン (Tuban)、セダユ (Sedayu、現在は Sidayu と表記される)、グレシック (Gresik) などであった。

このようなイスラーム教徒は、商業を営んだだけではなく、イスラームの伝達も行った。初期の頃は、一般庶民のみが影響を受けていたが、次第に、恐らく少しずつ、プリアイ (priyayi、貴族階層) の間にもイスラームの影響が広まっていった。

ジャワにイスラームが浸透したのが、マジャパヒト王国が混乱し、衰退してついには没落した時期と重なったのは神の思し召しであったのかもしれない。この時期には、現代なら「知識人」と呼ばれるようなジャワ人たちのイスラームへの入信が次第に増えていった。説得されたからなのか、生活のためにそうせざるを得なかったのかということは重要ではない。このようなことの結果として、知識人階層がイスラーム集団の中に集まり、次第にそれが権力の中心地となり、ついにはジャワ・イスラーム文化の中心地となったのである。

以上のような状況のもと、イスラーム的傾向の内容をもった作品が生まれた。このような作品は、以下に紹介するように、今日でも数多く残っている。

47 ボナンの書⁽²⁾

この作品は、いまだ中期ジャワ語で書かれているが、内容はイスラームに関するものである。文章はアラビア語の影響を受けており、解読は困難である。それに加え、例えば、ana pon (現代インドネシア語の ada pun に相当) のようにマレー語風の表現も多数みられる。

説明のために冒頭の文をいくつか引用することとする。神を讃えるアラビア語の定型句 Bismillahi... wa bihi nasta'in...のあと、以下のように続く。

Nyan punika caritanira Shaich al Bari, tatkalanira apitutur dhatěng mitranira kabeh; kang pinuturakěn wirasaning Usul Suluk wědaling carita saking kitab Ihya'ulum aldin lan saking Tamhid antukira Shaich al Bari aměthět ing

tingkahing sēsimpĕnaning nabi wali mu'min kabèh.

Mangka akĕcap Shaich al Bari, kang sinalamĕtakĕn dening pangeran, e mitranisun, sira kabèh dèn sami angimanakĕn wirasaning Usul Suluk ingkang kapĕthĕt tingkahing anaksĕni pangeran; miwah kawruhana yèn sira pangeran tunggal, tan kalih; saksĕnana yèn sira pangeran asifat sadya suksma, mahasuci tunggalira, tan ana pĕpadhanira kang mahaluhur. (後略)

翻訳は次のとおりである。

これは、シャイフ・アル・バリ (Shaich al Bari) ⁽³⁾が友人たちに教えを説いたときの物語である。彼の教えは神秘主義の基本の意味⁽⁴⁾についてである。それはシャイフ・アル・バリが修得した『宗教諸学の再興』 (*Ihyā' 'ulūm al-dīn*) ⁽⁵⁾とタムヒード⁽⁶⁾に基づいており、その中から預言者や聖者や信徒たちの秘められた行為を選び出したものである。

シャイフ・アル・バリ—彼にアッラーの祝福と平安あれ—は語った。我が友ら諸君、神秘主義の基本の意味を拠り所としなさい。その中から私は神への信仰を証す行いを選び出そう。神は一つであり、二つではないことを知りなさい。神は永遠であり、霊的であり、神聖であり、唯一であり、崇高であり、比類無きお方であることを証しなさい。(後略)

この作品はすでにラテン文字に翻字されて分析と詳細 (解説ではない) を加えたものが B. J. O スフリーケ博士の博士論文 (Schrieke 1916) として出版されている。

この作品と同時代の作品が存在するが、これは現在では次のような名前で知られている。

48 16世紀のジャワの文献⁽⁷⁾

本作品も中期ジャワ語で書かれており、内容もイスラームに関するものである。しかし、表記には混乱が多く、鼻音を示す記号が消失している部分もある。以下は、本文の一部から修正を加えて抜き出したものである。

Isarating imam, pitung prakara: kang dhumuhun asih ing pangeran, ka 2 asih ing nabi kabèh, ka 3 asihing wali, ka 4 angandhĕg satruning pangeran, ka 5 awĕdi ing siksaning pangeran, ka 6 angandĕl ing rahmating pangeran, ka 7 angĕgungakĕn pakoning pangeran, andohi sakĕh laranganing pangeran. //

Bagindh'Ali-raliyallahu nganhu-tinakenan dening wong: Ya Ali, punapa bot saking langit, punapa kang alo saking bumi⁽⁸⁾, punapa kang atos saking watu, punapa kang kaliwat sugih saking samudra, punapa kang kaliwat panas saking api, punapa kang kaliwat atis saking naraka Jamanirah, punapa kaliwat pait saking upas? // Maka sumahur baginda-raliyallahu anhuma: kang andalih ing lĕmahing wong abĕcik dĕn dalih ala, kaliwat bote saking amondhong langit, abĕcik dĕn dalih ala. Ka 2 kang abĕnĕr iku kaliwat alo saking bumi, ka 3 atining wong munapĕk iku kaliwat atos saking watu, ka 4 ati kang kana'at iku kaliwat sugih saking samudra, ka 5 ratu kang kaniaya iku kaliwat panas saking api, ka 6 tĕka anglarani atining wong, iku kaliwat asrĕp saking naraka Jamanirah, (ka 7) kang darana iku kaliwat pait saking upas. // (後略)

翻訳は次のとおりである。

イマーム（導師）の条件は7つである。すなわち、第1に神に対する愛、第2に預言者たちに対する愛、第3にワリー（聖者）に対する愛、第4に神の敵を阻むこと、第5に神の刑罰を恐れること、第6に神の慈悲を信じること、第7に神の命令を尊び、神に禁止されたことを遠ざけることである。

尊師アリー—アッラーよ彼を嘉したまえ—は人々からこのような質問を受けた。アリーよ。天空よりも重いものは何でしょうか。大地よりも広いものは何でしょうか。石よりも固いものは何でしょうか。火よりも熱いものは何でしょうか。海よりも豊かなものは何でしょうか。ジャマニラ地獄⁽⁹⁾よりも冷たいものは何でしょうか。そして毒よりも苦（にが）いものは何でしょうか。すると、尊師—アッラーよ彼を嘉したまえ—はこのように答えられた。善き人の誠意を貶める行為は、

天空を抱えるよりも重い。第 2 に、正直であることは大地よりも広い。第 3 に、偽善者の心は石よりも固い。第 4 に、誠実な心は海原よりも豊かである。第 5 に、暴君は火よりも熱い。第 6 に、人の心を傷つけるといふ行為はジャマニラ地獄よりも冷たい。(第 7 に) 忍耐することは毒よりも苦い。(後略)

この作品はすでに J. G. H. フニン博士によって解説なしでジャワ文字に翻字されて博士論文として出版されている (Gunning 1881)。H. クラーメル博士による博士論文 *Een Javaansche primbon uit de 16de eeuw* (Kraemer 1921) においてオランダ語でかなり詳しい解説が行われている。

49 スルック・スカルサ⁽¹⁰⁾

先に述べたように、この作品は中期ジャワ語による韻律作品であるが、韻律の形式は 8 音節 8 連からなる古いシュローカ体である。ただし、音節の長短の区別はなされていない。

この作品で語られていることは神秘主義的な主題であり、『デワ・ルチ』⁽¹¹⁾の中で示されていることとほぼ同じである。ただ違うのは、『デワ・ルチ』がイスラームではないのに対して、本作品がイスラームだということである⁽¹²⁾。

作品の冒頭部分はすでに欠損している。しかし、現在の状態を観察してみると、欠損した部分はそれほど多くないようである。例示のために本文から少しばかり引用したものを次に紹介する⁽¹³⁾。

5. pan sami pakèning suksma, margane antuk sampurna. /
dèn awas sira yan mulat, sampun kaliru ing sadya. /
yan sira tanpa guruwa, magsa waspaosèng suksma. /
ing suksma sira dèn awas, pan arusit prènahira. //
6. Ki Sukarsa wus anuksma, sinuksma ing jatisuksma. /
tèkèng sagara ma'ripat, tan emut ing jiwa raga. /
mangke atinggal sasana, amatèni pancandriya /
tan ketang salwiring lampah, iman tohid datan kocap. //

7. ma'ripat tan kauninga, karēm ing jroning sagara. /
jinatèn surahsyanira, ika sih nugrahaning hyang. /
tan ana ing jro ing jaba, duk sira tunggal sasana. /
tan kocap gusti kawula, atunggal sasananira. //
8. kandhah kalimput ing sadya, tan ana tētelanira. /
datan ana katingalan, paningale uwus ilang. /
ragane kadi bēbathang, awang uwung anarawang. /
ing dunya herat tan kocap, swarga siksa datan ana. //
9. kari rēraga kewala, Sukarsa sadya'nanira. /
tan ana muji anēmbah, datan ana kang sinēmbah // (後略)

翻訳は以下のとおりである。

5. すべてが「靈的なるもの」(suksma)による命令であり、それこそが完全なる境地を獲得する道筋となるのだ。(しかし)用心せよ。師に就くことなくして、靈的なるものに気をつけることは不可能である。靈的なるものに注意せよ。(さもなくば)かならずや威信を損ねることになる。
6. キ・スカルサはすでに靈的なるものと一体となり、真の靈的なるものによって靈的なるものと融合され、心と体(の区別)を忘却し、「神の認識」(ma'ripat)という海に到達した。その境地にあっては、五感は消滅し、いかなる行為にもとらわれず、信仰と神の唯一性を口にするともない。
7. 神の認識とは、目に見えぬ、あたかも海原の底に沈んだ、崇高な秘密に関する教えであり、これこそが神の恩寵なのである。そこには、内と外の区別はもはやなく、その境地に達した者には、神と自分という区別さえもなく、一つの境地にある。
8. (神の)御心により、抑えられ、覆われ、いかなる徴(しるし)もなく、なにも見えず、視覚もすでに消え去った。体は死骸のようである。

霞んだ空虚な雲のなかのようである。現世も来世もなく、天国も地獄もない。

9. 残るは籠のみであり、スカルサはあるものだけを望む。称えるものはなく、祈りを捧げるものはなく、祈りを捧げられるものもない。(後略)

また、以下は結末部からの引用である。

Sastra gumĕlar ing jagad, kang atuduh pangawikan. /
kang wruh ing tuduh sampurna, tan ana irĕng ing pĕthak. /
yĕn sira sampun waspada, lumampaha alon-lonan. /
kibirira lan sumungah, ujub loba singgahana. //

Ki Sukarsa wus alayar, ing sakathahing sagara. /
margane tĕkĕng ma'ripat, tan aetang urip pĕjah. /
damare murup tan pĕjah, panganggo mulya tan rusak. /
asangu tan kĕna tĕlas, angungsi ing desa jimbar. //

Ki Sukarsa dĕnya layar, parahu sabar darana. /
salat mangka tiyangira, kinamudĕn pangawikan. /
linayaran amangun hak, winĕlahan niyat donga /
dĕn watangi panĕnĕdha, dĕn pulangi lawan tobat. //

dĕn labuhi sukuru'llah, dĕn talĕni lan kana'at. /
dĕn pulangi lan wicara, dĕn damari ma'arifat. /

Ki Sukarsa dĕnya layar, wus tĕkĕng sagara rahmat. /
kawasa dĕnira layar, wus tĕkĕng sagara ora. //

翻訳は以下のとおりである。

この世界に広げられた書物は知識を目的とする。

究極の境地を指し示すものを知る者にとって白における黒ではない⁽¹⁴⁾。

もしすでに注意深くあるならば、ゆっくりと歩むのがよい。独断と傲慢、尊大と強欲を避けるのがよい。

キ・スカルサは大海原に船出した。
その道は、生と死の区別もない「神の認識」に至る道である。
その灯火は、消えることなく、破れのない崇高な衣装を照らす。
広大な地域へと進み出しても、その糧食は尽きることがない。

キ・スカルサは、航海にあたって、忍耐を船とする。
礼拝はその柱であり、知識をその舵とする。
真理を掲げることその帆とし、誓いと祈祷をその櫓とする。
祈願に悔悛を合わせてその棹とする。

感謝をその錨とし、安堵に言葉を合わせてその綱とする。

「神の認識」をその灯火とする。

キ・スカルサは、航海によって、慈悲の海に到達した。
その威力により、航海によって、非存在の海⁽¹⁵⁾に到達した。

ここで例示した結末部分は、以下に引用するハムザ・パンスリ (Hamzah Pansuri)
⁽¹⁶⁾のマレー語の詩と比較すると興味深い。

Wujud Allah nama përahunya. /
..... /
iman Allah nama këmudinya, /
yaqin akan Allah nama pawangnya. /
taharat dan istinja nama lantainya. /
kufur dan ma'siyat air ruangnya, /
tawakul akan Allah juru batunya. /
tawhid itu akan sauhnya. /
Illa⁽¹⁷⁾ akan talinya /
kamal Allah akan tiangnya⁽¹⁸⁾. //

翻訳は以下のとおり。

アッラーの存在、それが船である。
(中略)
アッラーへの信仰、それが船の舵である。

アッラーへの確信、それが船のパワン (pawang) ⁽¹⁹⁾である。

割礼と浄め、それが船の甲板である。

不信仰者と罪、それが船底にたまる汚水である。

アッラーへの信頼、それが船のジュル・バトゥ (juru batu) ⁽²⁰⁾である。

神の唯一性、それが船の錨である。

信仰告白、それが船の綱である。

アッラーの完全性、それが船の帆柱である。

次に、イスラーム時代に作られた最も古いもので、中期ジャワ語によるマチャパット (macapat) ⁽²¹⁾形式で書かれたものとしては、以下の文献がある。

50 コジャ・ジャジャハン⁽²²⁾

本作品は教訓を内容に含んでいるが、形式は物語の形がとられている。語られているのは、正義感にあふれ、賢明で、信心深く、王に忠誠なコジャ・ジャジャハンという名の宰相である。

彼は善政をしいたので、エジプトの王から絶大な寵愛を受けていた。その結果、ほかの重臣たちの間に反感を引き起こした。重臣たちはこぞって彼の粗探しをするようになった。

そしてついに、重臣たちの作戦は功を奏し、宰相コジャ・ジャジャハンは殺されたのであった。その遺体は神秘的な光をまとっていたが、これは彼が無罪であったという証であった。王はこれをひどく悲しみ、病を患い、死んでしまった。

本作品の文体は大変美しいが、テキストに乱れが多いことが惜まれる。169 詩節から成り、詩の韻律は全編にわたりダンダングラ (Dhandhanggula) の形式で詠まれている。以下は、作品の冒頭からの引用に訂正を加えたものである。

1. Kady agring tyas kapasah myang srining kartika wiwarjèng kalëngëngan, cipta'ngèl panamunane, marma kamarna langu, ing nagari pinindha rasmining pasisir Parwata, lila nggènya mangu, yèn maha harsèng Basanta, tona rëcëping smita'rijèng gita na lwir pinindha sakalangwan.
2. Ramya lwir padudon kalangëning pasisir Parwata dadya raras, wraning nayèngita mangke, sipta smita sumawur, yayah pangjrah ing sari minging,

lwir gĕrah mandra'ngde mar, sarkara winuwusnira sang para sujana,
pamrĕming subasita wĕdharing sari, lwir sande sakalangwan.

3. Lwir sasi Basanta pamĕwĕhing, hir wya-wya'rum angrĕmakĕn driya,
pangirahing cipta cĕp mangke, kwĕhira sang para utamĕng naya pupul
alinggih, utar-otaran smita'rjaning tyas winĕtu, lwir langw angjrah
sakalangwan, satataning sih manah amangun brangti, nitya nalyani cipta.
4. Pringga gronging patapan tĕpining, pasir pindha sang para utama yan angling
duga manise, ring wwang suddha apupul, lwir sunyaning langĕn pucaking
Parwata nyĕnyĕp ramya pan sarwa'dhi wuwus, ring amĕdhar rasaning
wardayaningcipta'nglĕngĕngakĕn tyas kawi, lwir sande sakalangwan.
5. Nahan pangrancananing tyas brangti, lam-lam amĕdhar ramyaning radya,
pangring-ringi langĕn dumĕh, mangkana manggih tanduk, wontĕn ta
carita'nyar prapti, sambang sambang ing tĕmbang, wirasanya'rja'lus, purwa
sakĕng nusantara, panĕnggran Kojā Jajahan ratu Mĕsir, nagarĕng purantara.

翻訳は以下のとおりである。

1. あたかも星の輝きに魅せられ心が患い、恍惚を捨てようにも、魂が抑えることができないように、かくして都の美しさが描かれる。あたかも海岸と山岳の美しさのように散り散りである。バサンタ⁽²³⁾の季節を強く望むのであれば、魅惑に満ちた、詩歌の麗しい徴の美しさを見よ。
2. 海岸と山岳の美しさの違いは光り輝く詩歌の美しさへと変わった。あたりを震わせる雷で、芳しい花は、星屑のように、散りばめられる。思うにまかせぬ花の美しさを捉える詩歌を、識者たちはサルカラ⁽²⁴⁾と呼ぶ。
3. バサンタの月が、心を和ませる芳しい北西⁽²⁵⁾の風を呼び寄せ、物憂い気持ちを静める。賢者たちは集まって座し、心から湧き出る美しさ(詩歌)を競い合う。美しいものが同じく美しいものと出会う様は、想い焦がれる心と変わることなく、常に魂を虜にするかのようなようである。

4. 海岸の修行場の深い溪谷には近づきたい。聖仙たちが誠実にして甘美な言葉を、集まった聖人たちに語るようだ。山岳の頂上における美が無であるように、美はまったくの静寂となる。思うに任せぬ詩人の心を陶醉させる、心の感情を明らかにする言葉はすべて美しい。
5. これが、王国の美しさを明らかにしようと夢中になって、想いに焦がれる心の描写であり、かくして（この詩の）目的となる。魅力的で繊細な表現をもつ韻律で詠まれた新しい物語が作られた。この作品は、その古の発祥の地をヌサンタラ⁽²⁶⁾に持ち、異国の地⁽²⁷⁾の国エジプトの王コジャ・ジャジャハンという名である。

したがって、このときになってこの物語は初めてジャワの地に入ったということになる。『コジャ・ジャジャハン』の作者は知られていない。ただ、結末部の詩章において、この作品がパナラガ（Panaraga）で作られたという記述が見られるのみである⁽²⁸⁾。

ただし、「作られた」という表現はここでは必ずしも「初めて作られた」ということを意味するものではなく、パナラガで「書き写された」という意味で解釈することも可能なのである。

したがって、この作品の原作はさらに古いかもしれない。それどころか、この作品がジャワにおけるイスラームの初期の中心地であったギリ（Giri）で作られたという手掛かりも存在するのである⁽²⁹⁾。

51 スルック・ウジル⁽³⁰⁾

本作品の内容は、スナン・ボナンがウジルというこびと⁽³¹⁾に対して説いた教えである。ウジルはマジヤパヒトの王の元下僕であったと語られているが、この王が何代目のどの王かは明らかにされていない。当然のことながら、この作品の中での教義とは完全なる境地に至る教え、つまり神秘主義思想に関することである。スナン・ボナンによって語られる神秘主義思想は他の作品、例えば『デワ・ルチ』（Dewaruci）、『ニルアルタプラクルタ』（Nirarthaprakrēta）、『スルック・スカルサ』（Suluk Sukarsa）等にも散りばめられている⁽³²⁾。表現の違いがみられるが内容としては同じものである

『スルック・ウジル』は 104 詩節から構成され、第 55 詩節のみが古典的な韻律であるアシュワラリタ (Aśwalalita)、第 56 詩節はマチャパット韻律のミジル (Mijil)、これら以外はマチャパット韻律のダンダングラ (Dhandhanggula) の形式で詠まれている。アシュワラリタでは音節の長短が保たれているが、これは成立が古いということを表している。筆者の知る限りでは、カルタスラ時代から現在にかけて、音節の長短のあるアシュワラリタの韻律を用いて作るジャワ人はいないからである。

作品中では、年代がスンカラ⁽³³⁾の形で現れる。panërus-tingal-tantaning-nabi はサカ暦 1529 年、すなわち西暦 1607 年である。この年号が何と関係しているのかは不明であるがその頃にはすでに本作品が存在していたことは明らかである。なぜなら、この部分が後代の付加とする形跡はないからである。したがって、この作品はマタラム王国のスルタン・アグン (Sultan Agung、在位 1613~1646 年) の父であるセダ・クラピャック (Seda Krapyak、在位 1601~1613 年) の時代にはすでに存在したということである。

以下は作品の一部の引用である。

19. Dipun wëruh ing urip sajati, lir kurungan rëraga sadaya, bëcik dèn wruhi manuke, rusak yèn sira tan wruh, hih ra Wujil salakunèki, iku mangsa dadiya, yèn sira'yum wëruh, bëcikana kang sarira, aswèsmaa ing ënggon punang asëpi, sampun kacakrabawa.
20. Aja'doh dera ngulati kawi, kawi iku nyata ing sarira, punang rat wus anèng kene, kang minangka pandulu, trësna jati sariranèki, siyang dalu dèn awas, pandulunirèku; punapa rëkèh pracihna, kang nyatèng sarira sakabèhe iki, saking sipat pakarya.
21. Mapan rusak sajatinirèki, dadine lawan kaarsanira, kang tan rusak dèn wruh mangka, sampurnaning pandulu, kang tan rusak anane iki, minangka tuduh ing Hyang, sing wruh ing Hyang iku, mangka sëmbah pujinira, mapan awis kang wruha ujar puniki, dahat sipi nugraha.

翻訳は以下のとおりである。

19. 正しく生きることを理解なさい。身体は鳥かごのようなものである。

(その中に)鳥がいると知りなさい。もしそのことを知らなければ、災厄が起こるのであろう。ウジルよ、お前の行動はすべて報われないことになる。もし理解したければ、自らを清めるのがよい。そして人に知られぬ静寂なる場所に住みなさい。

20. 詩人 (kawi) を探すために遠くへ行く必要はない。詩人は実に己の身体の中に存在するのである。全世界もまたその中に存在する。それを見ることができるよう、自らの身体を真正なる愛 (trēsna) としなさい。昼夜分かたず自分の見るものに注意を払いなさい。どのような徴であれ、自らの身体に現れることはすべて、自身の行動のあり方に由来するのだ。
21. 正しいことが墮落することもある。物事の結果はすべて自身の意思による。したがって、墮落しないものとは、完全なる視点であることを知りなさい。そしてその状態を保つ者は、神の居場所を示すことができ、神を知る者はその崇拝が成就する。しかし、このことはまさに恩寵であり、それを知って言葉にする者は稀である。

この作品はすでに 1938 年に *Tijdschrift Djawa* においてラテン文字に翻字され、オランダ語に訳して分析と比較がなされたものが刊行されている (Poerbatjaraka 1938)。

52 スルック・マラン・スミラン⁽³⁴⁾

この作品はスナン・パングン (Sunan Panggun) が、イスラーム法を犯したため、ドゥマック王国の命令で火刑に処されて火の中にあったときに書かれたものと言われている。このようなことが本当にあったのかは定かではない。

この作品の内容は、完全なる境地に至る教えに関するものであるが、イスラーム法に厳格に従う人々への当てこすりも見られる。真理に到達した者の話も以下のように語られている。

11. Dosa'gung alit tan dèn singgahi, ujar kupur kapir kang dèn ambah, wus liwung pasikēpane, tan andulu-dinulu, tan angrasa tan angrasani, wus tan ana pinaran,

pan jatining suwung, ing suwunge iku ana, ing anane iku surasa sajati, wus tan ana rinasan

12. Pan dudu rasa karasèng lathi, dudu rasaning apa'pa lawan, dudu rasa kang ginawe, dudu rasaning guyu, dudu rasa kang angrasani, rasa dudu rērasan, kang rasa amēngku, sakèhing rasa karasa, rasa jati tan karasa jiwa jisim, rasa mulya wisesa.
13. Kang wus tumēka ing rasa jati, sēmbahyange tan mawas nalika, lwir mili jatine, tan ana jatipun, muni mona turu atangi, saosiking sarira, pujine lumintu, raina wēngi tan pēgat; puji iku raina wēngi sirèki, akèh dadi brahala.
14. Pangrunungsun duk rare cili, nora Sēlam dening asēmbahyang tan Sēlam dening pangangge, tan Sēlam dening saum, nora Sēlam dening nastiti, tan Sēlam dening tapa, nora dening laku, tan Sēlam dening aksara nora Sēlam yèn anut aksara iki, tininggal nora èsah.
15. Sēlame ika kadi punēndi, kang ingaranan Sēlam punika, dening punapa Sēlame, pan ing wong kapir iku, nora dening amangan bawi, yadyan asēmbahyanga, yèn durung awēruh, ing sajatine wong Sēlam, midēra anglikasan amontang-manting, jatine kapir kawak. (後略)

翻訳は以下のとおりである。

11. 大小のいかなる罪も避けるものではない。異端者だと呼ぶことがすでに混乱した態度である。見ることも見られることもなく、感じることもなく、感覚から離れることもなく、目標とするものもない。実のところ、本質とは無であり、無の中に存在があり、その存在の中に真実の意義がある。もはや、感じなければならない対象は存在しない。
12. 感覚とは唇により味わわれるものでなく、感覚とは何かしら作られたものでもなく、感覚とは笑いでもなく、感覚とは感覚から離れたものもなく、感覚とは感じられる対象でもない。感覚はすべてを包み込むものであり、すべての感覚はおのずと感じられるものであり、真の感

覚とは魂によっても身体によっても感じられるものでない。高尚なる感覚が主宰者（*wisesa*）なのである。

13. すでに真の感覚に達した者にとっては、祈りが何かを見ることにならない。あたかも流れる水が実体をもたないかのごとく。眠るときも目覚めるときも口にして、体の動きも一つにして、祈りは昼も夜も途切れることはない。昼も夜も多くが偶像を崇める。
14. 幼いころよく耳にしたものだ。イスラームでないかは礼拝で決まる、イスラームでないかは服装で決まる、イスラームでないかは属する集団で決まる、イスラームでないかは思慮で決まる、イスラームでないかは修行で決まる、イスラームでないかは行動で決まる、イスラームでないかは文字で決まる、イスラームでないかはこの文字に従うかで決まると。しかし、残ったものは正しくないものだ。
15. イスラームとは一体何なのか。イスラームと呼ばれるものは何をもってイスラームと呼ばれるのか。人は豚肉を食べるから異教徒となるのではない。イスラームの本質を知らぬまま礼拝をしても、それは同じところをぐるぐると回る糸巻きのようなもので、実のところ彼らこそが頭の固い異教徒なのである。（後略）

ここで引用したものはかなり古い時代に創られた作品である。多くの改変や追加がなされたより新しい作品も存在しており、これはすでに 1927 年に Dr. W. J. Drewes によりオランダ語の解説と分析が付け加えられたものが *Tijdschr. Djawa* 第 7 巻 97 ページにおいて刊行されている（Drewes 1927）。

また、さらに改変や追加がなされた『スルック・マラン・スミラン』がジョグジャカルタのブラフマ・ウィディヤ（*Brahmawidya*）協会から 1937 年 12 月に出版されている⁽³⁵⁾。

新たに付け加えられた表現は、神智学の人々の慣習と同様の物語である。しかし、もし私の理解が間違いないとすれば、上に引用した第 11 詩節の部分の表現はジョグジャカルタ版には見当たらない。また、構成に関しても、私が引用した版と比較すると、混乱が目立つ。

『スルック・マラン・スミラン』には年号は記されていないが、スナン・パングン (Sunan Panggun) の著作と言われていることを考慮すると、スナン・ボナンの著作である『スルック・ウジル』に近い年代に書かれたと私は推測しておく。

53 ニティスルティ⁽³⁶⁾

この作品は今からおよそ 50 年前⁽³⁷⁾のスラカルタ時代に大変有名なものであった。内容も、有益な教えなどに富んでいる。冒頭部分においてスンカラで年号が記されている。スンカラは *Sarasa sinilēm ing jaladri, bahnimahastra candra sangkala*、すなわちサカ暦 1534 年、西暦 1612 年を表している。

したがって、この作品の成立は、先ほど紹介した『スルック・ウジル』の成立年代とはわずか 5 年の差しかなく、やはりセダ・クラピャックの治世下であったことになる。しかしながら、一般に『ニティスルティ』はパジャン (Pajang)⁽³⁸⁾王国のカランガヤム (Karanggayam) 王子の著作とするのが通説である。

私見に基づけば、この説は正しいとも言えるし、誤りであるとも言える。年号に従えば、この作品がマタラム王国時代のものであることは明らかである。したがって、「パジャンのカランガヤム王子の作品」ということを、「パジャン王国時代」のラデン・ジャカ・ティンキル王⁽³⁹⁾の治世における作品であると解釈するならば、正しくない。一方、「マタラム王国時代」のパジャンに住むカランガヤムの王子の作品である解釈するならばその説は正しい。

パジャンという町ないし村はマタラム王国時代に入ってから人も多く集まっており、有力者や貴族たちもその地にとどまっていた。したがって、時代はすでに (マタラム王国の) セダ・クラピャック王の治世下になっていたが、カランガヤム王子はいまだパジャンに住んでいたとしても、正しい可能性はある。

この作品がパジャン王国時代に創られたという説が生まれる理由となったのは、スラカルタのパサル・クリウォン (Pasar Kliwon)⁽⁴⁰⁾に由来する『ニティスルティ』 (Bat. Gen. No. 94) の序文である。以下、それを紹介する。

Punika kakawin Nitisruti, anggitanipun pangeran ing Karanggayam,
lënggahipun ėmpu jangga ing Pajang. Panganggitipun wau awit saking karsa
dalēm ingkang Sinuhun Kangjĕng Sultan ing Pajang, wiwitan dumugi ing

wĕkasan sadaya sangang dasa kalih pada. Sasampuning tamat panganggitipun lajĕng katĕdhak sinĕrat dening Arya Dhadhaptulis, lĕnggahipun panyarikan dalĕm ing Pajang. Wiwiting pĕnyĕrat ing malĕm Rĕbo tanggal kaping kawan wĕlas wulan Asura, ing taun Wawu, windu Sancaya, sinangkalan nalika panganggitipun bahnimahaastra candra ... , dados angkaning warsa 1513.

翻訳は以下のとおりである。

これは、ニティスルティというカカウインで、カラングヤムの王子の作品である。彼はパジャン国の宮廷詩人で、パジャン国王の要望で本作品を創作した。初めから終わりまで、92 詩節から成る。創作されたのち、アルヤ・ダダップ・トゥリス (Arya Dadap-Tulis) というパジャン国王の書記により書き写された。書き始めた時は、さんサンチャヤ (Sancaya) のウィンドウ (windu)、ワウ (Wawu) の年 (taun)、アシュラ (Asyura) の月 (wulan)、14 日、水曜日の夜であった⁽⁴¹⁾。書き記した時のスncカラは *bahni mahaastra-candra*…、すなわち (サカ暦) 1513 年であった。

一言で言って、この解説はまったくでたらめである。まず、スncカラの読み方に誤りがある。仮にそれが正しいとすると、1513 年に該当することになるが、これをパジャン王国のスルタンの時代と一致させようとすれば誤りということになる。なぜならサカ暦 1513 年 (西暦 1591 年) というのはすでにマタラム王国のパヌンバハン・セナパティ (Panĕmbahan Senapati) が統治していた時代になるからである。パジャン王国の統治はサカ暦 1508 年 (西暦 1586 年) までである⁽⁴²⁾。したがって、ここでもう一度述べるが、先ほどの解説は大変いい加減なものである。今後これを研究しようとする者はいないであろう。

『ニティスルティ』の作者は『ラーマーヤナ』の愛好者であった。『ラーマーヤナ』からの表現の借用が大変多く見受けられる。とくに *Asta brata-Wibisana*⁽⁴³⁾の部分などはすべて引用されており、第 76 詩節から第 82 詩節までを占めている。

道徳的な教えを別にすると、『ニティスルティ』には神秘主義思想についての記述がある。たとえば第 88 詩節には、戦を行う人における神秘主義については以下のように表現されている。

88. Satyakĕnang naya atoh pati, yeka palayaraning atapa, gunung wĕsi wasitane, tan kĕdhap ing panduluning dumadi dadining bumi, akasa mwanng i riya, sasamaptanipun, jatining purba wisesa, tan ana lara pati kalawan urip, uripe tansĕng tunggal.
89. Panjuring sarira wus wruh lwirning, lara'ntaka nir tang baya tansah, nirnakĕn trasa wĕkase, aywa ngrasani antu, aywa mara sadya matĕni, wyakti tatan winĕnang, wĕwalĕr asĕlur, singa sadya matĕn ana, wyakti anggantĕni gantunganing pati, pan salwir wĕwangsulan.

現代語の散文形式で解説すると以下のようになる。:

88. 忠告に従って鉄の山の上で修行する者のように、導きに従って自らの命を捧げることを誓いなさい。さすれば、天と地とそこにあるすべての出来事と生き物について誤った見方をすることがなくなるであろう。主宰者のいにしへの真実を受け入れることである。死もなく、生もなく、生きるということは常に一つなのである。
89. なぜなら、病や死についての本質を知ること、身体はすでに滅しているからである。心配する対象はすでになく、ついには恐れも消える。死という言葉は口にしてはならない。殺しを望んではならない。これらは許されていない。許されていないことはたくさんある。誰であれ殺しを望む者には必ずや死刑が下される。なぜならこの世界では因果応報で成り立っているからである。

続いて以下は『ニティスルティ』第17詩節の内容である:

rĕhne pangiwa sampun kinawi, kasujanan sujana sarjana, mingis ingungas gandane, pan wus kinirtĕng kidung, koja lawan sang natĕng Mĕsir, rĕh sang para sujana, anjarwakĕn wuwus, wignyaning pradnya gitadnya, kasusilan lan salungguhing naya'di, yan ika kadriyana.

翻訳は以下のとおりである。

イスラームに由来しない書物の中で、賢明さの規則と賢明な識者のふるまいについてすでに説明がなされている。もしそれらをしっかりと読むならば、感じ取ることができるであろう。また、コジャ・ジャジャハンとエジプトの王の功績もキドゥンとして詠まれている。多くの賢者たちが教えを説いているが、その知識も、もともとは道徳についてや善行の持つ意味について記した古い書物から彼らが学んだものなのである。それを心にとどめておくように。

ここで言及されているコジャとエジプト王は、明らかに先に解説した『コジャ・ジャジャハン』に出てくる人物であり、そのことから『ニティスルティ』の方がより新しい年代の作品であると推測できる。

本作品の言語表現は大変に美しいが、残念なことにすでにテキストの多くの部分が乱れている。

テキストは乱れたままではあるが、本作はすでにジャワ文字で出版されている。この刊本は、カウイ（古ジャワ語）、ジャルワ（現代ジャワ語翻訳）、タフシール（解釈）の3段構成になっている。私の誤りでなければ、この出版をおこなったのはスラカルタの De Langen 出版社で、1871年のことであった⁽⁴⁴⁾。

54 ニティプラジャ⁽⁴⁵⁾

本作品は『ニティスルティ』の「弟分」の作品であると言われている。ほとんどすべてにおいて『ニティスルティ』に倣っている。内容も同様の部分が多い。宰相が国の重臣たちに、国政や国民の統治に関する忠言を与える。

本作品が『ニティスルティ』の弟分の作品であるということを明らかにするために、ここでは冒頭の一部を引用して紹介する。:

Kadi silēm ing sagara gēni, rasaning driya eka sangkala, duk linakwan panyarike, Nitipraja ingapus, dening midha pracaya ngapti, amiyatèng sarira, anglèngkara punggung, kumawi paksa utama, kwèhning jana prahita tan winigati, kèdah ingalēm wignya.

Sampun kagiwang ing krama yakti, ilang kelangan dadi kapapa. Puwara rusak ragane, dumadak kapisandung, lamon sira tan wrin paranti, raganira lwir ratna,

ing sela dinulu, dadarĕn sadina-dina, aja tungkul ing silakrama prayogi, dadi dĕling ing raga.

Lamon sira tinitah bupati, anganggeya kasudarman, dĕn kadi surya padhange, sumadyaa lwir ranu, mungging'cala Himawan ĕning, mwanng kadi ta samudra, pamotirĕng tuwuh, rahing amawi santana, wruhanira lwir warsa taru lata'nglih, mangsaning labuh kapat.

Mĕndhung galudhug dhawuhing riris, kang dĕn pinta dening bala kosa, dĕn tahĕnakĕn awake, kajawĕhan angrĕmbun, enggar-enggar dĕnira amrih, kula busana boga, wanita dĕn yun-yun, iku ta sadyaning bala, yĕn anyidra ing dana kramaning asih, tan wande janma sunya. (後略)

翻訳は以下のとおりである。

この『ニティブラジャ』を書き記すべく執筆に務めていたときには、火の海原に潜っているかのような心境であった。自分の信念に従って自分自身を愚かであることはあり得ないと認識したからである。無理に優れた詩人のようふりをして、賢い人の中には注目されずに終わる人が多い。それは賢いと称賛されようとするからだ。

けっして計略にだまされてはいけない。失うことは苦難となろう。最後には身体を壊してしまう。身体は石のように見える宝石である。毎日、磨きなさい。うわべだけの美辞麗句に動かされては、内面から輝くことはできない。

もしあなたがブパティ (bupati) ⁽⁴⁶⁾となる運命になったら、最良の慣習を採用しなさい。晴れた日の太陽のように、ヒマラヤ山にある湖のように、そして、事物の育つ海洋のようになりなさい。親類を持つことで、4番めの月 (mangsa) ⁽⁴⁷⁾が訪れたときに木の葉が(緑に)色づくように振る舞いなさい。

(雨季になって)雨雲の雷が鳴ると雨が降り注ぐ。家来たちが望むことは、雨にずぶ濡れになっても堪え忍ぶことである。主人として自ら

進んで家来たちに彼らの望む衣食を恵み、また伴侶を与えるのがよい。
もし慈愛の印である気前の良さという慣習に逆らうなら、必ずや人は
離れていなくなるだろう。(後略)

以上の引用から明らかに分かることは、この作品が『ニティスルティ』に取材しているということである。冒頭部に用いられているスンカラは *gēni-rasa-drya-eka*、ジャワ暦 1563 年、すなわち西暦 1641 年の年号を示しており、これはマタラム王国のスルタン・アグン王の治世と一致する。したがって、『ニティプラジャ』はこの王自身の作品と言われていることにも可能性がある。

『ニティプラジャ』にもコジャ・ジャジャハンの物語が含まれており、『ニティスルティ』中に収められているものと比較すると、長くなっている。

以下がその内容からの引用である。

Wontēn pēpatihing Raja Mēsir, umung kaloka tinēpa-tēpa, Kojajajahan
wastane, bala Mēsir kawēngku, saparentahira ngecani, para ratu kabala,
samyasih alutut, sakathahing para nata, yèn aseba asamodana ing patih, mantri
sakancanira.

Sinogata kwèhing tandha mantri, para ratu kang ayun aseba, tinuwukan
sakarsane, busana wastra luhung, sabuk layan dasthar sumaji, tēkèng jawi
warata, baksana lumintu, sēsampuning andrawina, sami mijil asewakèng sri
bupati, Kojalumakwèng wuntat.

Tētiga panakawanira'sri, kang anggawa cis upacaranya, kaskul lawan
lulunggule, akampuh wastra lusuh, akulambi tambal raspati, sabukipun kaloka,
nyampingipun wulung, kris landheyan bēbēngukan, dènya patih tungkul ing
susilanya'di, patine kēnèng cidra.

翻訳は以下のとおりである。

エジプトの王の宰相に大変に有名で人々に慕われて宰相があった。彼の名はコジャ・ジャジャハンであった。エジプトの民衆を統治していたが、民衆は彼の命じたことは何でも従った。王たちには愛情と任務をもって仕えていた。王たちは、表向きは宰相や大臣たちやその仲間

たちと良い関係を保っていた。

あるとき部下の大臣たちをもてなし、王たちも出席した。美しい衣服、ベルト、頭飾りなど、望みの物は何でも与えられた。食べ物は外にあふれるほど尽きることなく配られた。十分に堪能したところで、王たちが外にでると、コジャは後を歩いていた。

宰相の印である短槍、器、御座を持った3人の見栄えのする従者を付き従えたコジャは、上質な布のショールをまとい、6枚の端布からなる衣装を付け、木の皮でできたベルトを巻き、布地の色は濃紺で、鋭く研がれた短剣を身に帯びていた。清廉であったこの宰相は、人々にも大変慕われていたが、不運にみまわれ死ぬことになった。

以上の引用から、マタラム王国時代には『コジャ・ジャジャハン』が大変に有名であったことが分かる。

現存する『ニティプラジャ』の原典に見られる古い言葉は写本者によって改変されたようである。もっとも、上に私が引用した部分には本来の表現が多い。なぜならば、ジャカルタ博物館に収蔵されている古い文献から引用したものだからである。

55 セワカ⁽⁴⁸⁾

この作品は王に仕える者に対する助言を説くものである。冒頭部の引用を見ればこれらの助言の意図は明らかである。

以下が冒頭部からの引用である。

Layang sewaka manira ngawi, jalma paksa kawayang buwana, sakala duk pangapuse, tēpa palupinipun, rēhning sumawita bupati, aywa manah nalimpang, ing warah lan wuruk, ing purwa madya wasana, aywa lali ing tata kalawan titi, takona tētirona.

Satyane kang antuk sihing gusti, angawula sēdyakēna tapa, gusti pētēn barēkate (後略)

翻訳は以下のとおりである。

『セワカ』は *jalma-paksa-kawayang-buwana* の年に記した。これは王へ忠誠を尽くすことに関する手引の書である。心は唯一、教えに帰依し、戸惑うことを止めよ。そして、みずからの根本から先端まで、規則・規律に沿って生きることを心掛けよ。積極的に良い教えを求め、それに従うのがよい。

忠義を尽くす者よ、強い心を保つために、常に修行をすることを心掛けければ、幸運が舞い降りるであろう。(後略)

この作品には *jalma-paksaka-wayang-buwana*、すなわちサカ暦 1621 年（西暦 1699 年）というスンカラによる年号がある。これはパク・ブウォノ（Paku Buwono）1 世⁽⁴⁹⁾の兄にあたるマンクラット（Mangkurat）2 世の治世である⁽⁵⁰⁾。

この作品で用いられている言語はもはや現代ジャワ語と呼んでよいものである。ただし、現在では意味が変わってしまった語が若干ある。例をあげると、‘satya’は「誓い」の意、‘luwang’は関係代名詞 *kang* の意、‘wis klakon’は「慣習」の意で用いられている。全体的に見れば『セワカ』の中で使われている言葉は滑らかで、明瞭で、気まぐれな表現はさほど多くない。

以下に作品の一部からの引用をあげておく。

15. Ingkang aguna sarana sèkti, awiwitan tabëri ing kina, mila luhur darajate, ing wong sungkanan iku, nistha ala-alaning jalmi, sarèhe wong ngawula, gusti prihèn butuh, ngunguna sasèpinira, wong kang guna kalah dening wong tabëri, kang agriyèng pasowan.
16. Wong tabëri matane lan kuping, kang amuruk ing sadina-dina, wèkasan dadi pintère, kang katon kang karungu, kang abècik dipun wèwuri, gumarit ing wardaya, dèn tarimèng wuruk, tan nalimpangakèn warah, lamon ana wuruking mata lan kuping, age laksanakène.
17. Lan aja pègat aminta wisik, wuruking kanca rewang sapangan, kabèh prihèn barèkate, kulanana sadarum⁽⁵¹⁾, agèng alit prihèn padha'sih, yèn ingaruh-aruhan, solahe kang dudu, narima'ge owahana, tarimanèn wong iku nyata yèn asih, tandhane asung warah.

18. Iku mulane wong dadi bangkit; kang bodho datan narimèng warah, warèngkèng awèt bodhone, yèn kajog kapisandhung, arus amis akèh kang gèthing, sami sèngit sadaya, tan ana'sung wèruh, angangge karèpe dhawak, tuna liwat ing budi tan dèn kawruhi, wèkasan untuk walat.

翻訳は以下のとおりである。

15. 賢く、知識に長け、靈力にも長ける者は、実はその前世で徳が高かったのである。やる気がなく、消極的な者は人間の中でも最低の部類に分類される。仕える者よ、あなたの主人があなたを必要とし、あなた無しでは路頭に迷うように努めよ。いくら賢い者でも、経験豊富で勤勉な者に対しては敗者となる。
16. 聴くこと、視ることに關して勤勉で、日々学習する者は、いずれ賢き者となる。見聞きして良いと思ったことはそれを真似し、心に刻み、教わらなくても自らそこから学びを得るのがよい。教えを見聞きした時はそれを即座に実行しなさい。
17. 同僚からの助言を断わることは良くない。そこから幸運を摘み取り、またそれを大小惜しまず彼らに与えるのがよい。自らの過ちに対し助言を受けた場合は、謹んで、即座にそれを改め、その助言を与えてくれた人が、あなたに対し教えを説いてくれたのだと思いなさい。
18. これが、賢き者になるための初歩である。教えを受けようとしないのは真の愚か者であり、融通の利かない者である。いったん悪事に手を染めれば、あとは腐って行くばかり、皆に嫌われ、嫌いになり、助言を与える者もおらず、自らの欲望に従い、考えることもやめ、しまいには災難に見舞われることになる。

『セワカ』は1851年にすでにJ. A. ウィルケンス (Wilkins 1851) によってジャワ文字に翻字され、オランダ語に翻訳されたものが出版されている。しかしこの出版では古い表現の多くが新しい表現に替えられている。同様に、転写を行ったスマディラナ (Sumadirana) という人物によって序文の表現はすっかり差し替えられている。この新しい序文にあるスンカラは *naga-candra-rəsi-tunggal*、ジャワ暦1718年

という年号である。これは原本に記されている年号とほとんど 100 年の差がある。

56 メナック⁽⁵²⁾

イスラームがジャワの地に入ってくると、それに続いてイスラームの様々な物語も入ってきた。それらの多くは、マレー語をいったん中継している。しかしながら、各々の作品がいつ伝播してきたのかということは定かではない。

『メナック』の物語に関して明らかなのは、マタラム王国においてすでにジャワの作品になっていたということである。

『メナック』の母体になるのはペルシャに由来する物語である。この物語はまずマレー語の作品『ヒカヤット・アミル・ハムザ』(Hikayat Amir Hamzah) になり、そののちジャワ語に翻訳されて『メナック』になった。

この物語の始まりとなっているのは、預言者ムハンマドが伯父アッバス (Abbas) に、『メナック』の中でウォン・アグン (Wong Agung、ジャワ語で「偉大なる人物」の意) と呼ばれる叔父アンビヤ (Ambyah) について尋ねるところである。アンビヤはアッバスの弟であり、預言者の叔父にあたる人物である⁽⁵³⁾。

以下がそのあらすじである。

ウォン・アグン・メナック (Wong Agung Menak) とマダイン (Madayin) 国のヌルセワン (Nursewan)⁽⁵⁴⁾王は互いに敵対していた。ウォン・アグン・メナックはイスラームを信奉していたが、一方のヌルセワンは未だ異教徒であった。そうであるにもかかわらずこのウォン・アグンはヌルセワンの娘であるムニンガル (Muninggar) 姫と結婚したのである。このことこそが、読み手を飽きさせてしまうほどの長大な物語を可能にしたのである。この婿はその妻の両親を殺すことを試みるが、一方の両親は、これに敗れると、逃げ出して、ある姫を妹に持つ王に助けを求めた。ウォン・アグンとの戦いが再び起こった。この戦いでは、初めはウォン・アグンの敗北が確実であったが、くだんの王の妹である姫によって助けられた。のちにその姫はウォン・アグンの妃となった。再び戦が起こり、ヌルセワンが助けを求めた王が負け、降伏し、イスラームに入信した。当のヌルセワン王は逃走し、また別の王に助けを求めた。この後も同様の物語が続く。内容の差し替えなどは見られるものの、全体としてはすでに述べた大筋のとおりである。

『メナック』の諸作品の中で、現在、最古の作品とされているのは、カルタスラ

宮廷の王スリ・パドウカ・パク・ブウォノ (Paku Buwana) 1 世 (プグル Pugèr 王子) の妃カンジェン・ラトゥ・マス・バリタル (Balitar) の意向によりジャワ暦 1639 年に書かれたものである。この命を賜ったのは書記官ワラダナ (Waladana) の婿で書記官のナラウィタ (Narawita) であった。しかし、この作品が最初の作品ということではないであろう。最初の作品はこれよりもずっと古いはずである。

カルタスラ版『メナック』の物語はマレー語版の『ヒカヤット・アミル・ハムザ』に大変に近いものとなっている。言語表現にもジャワ島北岸部の言語の表現が見受けられる。キドゥン (kidung、韻律詩) の調子にも中期ジャワ語のキドゥンの特徴があり、その証拠に、rēke, rēko, tan asari, tan asatun, katengsun などの表現が頻繁に用いられている。シノム (sinom) 韻律の詩では第 3 行が o の音で終わるものが多い。

また、『メナック』の物語の形式は、基本的に『パンジ物語』の形式とまったく同じである。すでに解説した通り、『パンジ物語』の原典はその物語の美しさから多くのマチャパット作品の模範例となっているのである。これと同様に、『メナック』の物語の真髄も、『パンジ物語』の真髄と同じものである。ただ登場人物の名が異なっているだけなのである。『パンジ物語』の『メナック』への影響は、ラデン・グルフ (Radèn Galuh) (ムニンガルの別名) やそのほかの姫たちの名に現れている。同様に、ウォン・アグンの別名であるジャイエ (Jayèng) 何某、ジャイエ何某といった名前も『パンジ物語』から取り入れられたものなのである。

ジャワ・イスラーム時代において、本作品『メナック』は、イスラームの宣教の上で、人々に大変好まれていた。『メナック』が大変な人気を博したため、少なからぬ数の『メナック・パン』 (Menak Pang) ⁽⁵⁵⁾ も出現した。このような物語が広まった結果、ササク地域、ロンボク島、パレンバンにも伝わっている。パレンバンとササクの古い『メナック』の言語は生粋のジャワ語である。後代の作品には、ササク語の表現や形式の流入が多少見られる。

次に『メナック・パン』のなかでも一番有名な作品を紹介する。

57 ルンガニス⁽⁵⁶⁾

ここで語られるのは、アルガプ (Argapura) の丘で修行するある僧の話である。この僧は以前ジャミネラン (Jamineran) 国の王であった。この王はある娘を養子にとり、ルンガニス (Rèngganis) 姫という名を授けた。それからほどなくして王妃が

他界したため、王は王国を捨てて僧となったのであった。

ルンガニス姫は父によって修行場で育てられた。この姫は僧の娘であったため、幼い時から好んで修行をした。食べるものももっぱら花の蜜汁のみであった。そのため大変な霊力を備え、飛ぶことさえもできた。

ウォン・アグンの息子であるケラン (Kelan) 王子、別名ルパットマヤ (Rĕpatmaya) は、ジャミントラン (Jamintoran) 王国のジュルスル・アシキン (Julusul-asikin) という姫と結婚していたが、妻を愛することができなかった。その王子のすることと言えばバンジャラン・サリ (Banjaran Sari) という名の庭園に物見遊山に出かけることのみであった。

ある時、ルンガニス姫がその庭園にやってきて、花をいくつも摘みとると、花の蜜を吸って帰った。ケラン王子のもとには、公園の花々がしばしば何者かに摘み取られてなくなってしまうという報告が届いた。結局、ルンガニス姫はケラン王子に見つかってしまった。そのことで王子は姫に恋焦がれるようになった。姫は、妻になってほしいと王子から懇願されたが、ムカダム (Mukadam) 王国のカダルマニック (Kadarmanik) 姫と共に側室にならない限り、その申し出は受けられないと断った。

ルンガニス姫は何度も庭園を訪れたが、王子を除いてそのことを知る者はいなかった。そのため、何者かに懇願し続ける王子の様子を見て、お付の侍女たちは、王子の気がおかしくなってしまったのではと疑った。

ウォン・アグンは、ケラン王子が病気の上、ジュルスル・アシキン姫を愛していないことを聞きこんだので、王子とその妻を自らの宮殿に呼び出すよう家来に命じた。しかし、王子の病はますます重くなっており、妻を愛すよう助言を受けても従おうとはしなかった。

そこに、ルンガニス姫が現れた。ケラン王子は姫を歓迎して甘い言葉で口説き続けた。それを見た周囲の者たちは驚き戸惑い、病気の発作が出たのではと疑った。ルンガニス姫が立ち去ると、ようやく王子は口説くことをやめたのだった。

ある時、ルンガニス姫は、王子をアルガプラの修行場で父に会うよう誘った。ルンガニス姫が空を飛ぶと、王子は姫の腰布につかまった。修行場に着くと王子は姫の父である僧と対面した。

一方、ウォン・アグンの宮殿では王子が消えたことで大騒ぎとなっていた。ウォ

ン・アグンは王子を探すよう下僕のウマルマヤ (Umarmaya) に命じた。そこでウマルマヤはセ・ドゥル・クレス (Seh Dul Kures) という名の僧侶に王子の居場所はどこか尋ねた。僧は王子の居場所を示したが、ウマルマヤにはそのあとを追うことを禁じた。そして、その代わりにまっすぐムカダム国に向かうよう助言した。折しも、(ムカダム国の) カダルマニック姫はヒルマン (Hirman) 王子というマダイ (Madayin) 王の息子と結婚していたが、姫はこの王子のことが好きではなかったのである。

さて、ムカダム国の軍隊は人間ではなく、戦いに役立つ鉄の像だった。この鉄像でできた軍隊を操るのはマジユシ (Majusi) という名の者であった。このマジユシは盗人 (つまりウマルマヤのこと) が密かに探りに来ることを知り、人々にしっかりと警備にあたるよう命じていた。

さて、ウマルマヤは到着すると、眠りの呪文をかけたが効果がなく⁽⁵⁷⁾、かえって自分が眠気に襲われ、眠ってしまった。ただ自分の雑嚢は木の枝のてっぺんに縛り付けておいた。ウマルマヤはムカダムの軍隊に捉えられ、毒をもらわれて毒入りの井戸の中に放り込まれてしまった。ムカダムの人々は喜び勇んで宴を開いた。

一方のカダルマニック姫は大変心細い気持で、友であり師であるルンガニス姫の来訪を心待ちにしていた。カダルマニック姫はすでにイスラームに入信していたのだ。そこにルンガニス姫がケラン王子を連れて訪れたが、姫は王子を部屋の外に控えさせておいた。

カダルマニック姫は夫君のヒルマン王子のことが好きになれない、と泣き伏していたが、ルンガニス姫に慰められると、眠りに落ちた。そこで、ルンガニス姫は外へ出ると、入れ替わりに中に入ってカダルマニック姫といっしょに寝るよう、ケラン王子に伝えた。カダルマニック姫は、自分の横に殿方が寝ていることに驚いたが、王子は、実は、自分はルンガニス姫であり、殿方に姿を変えているのだと言った。それでもなお、カダルマニック姫はおびえを隠せない様子であった。

姫は、まだこの王子に心を開くことができない様子であったため、王子は部屋から出て行き、翌日にはルンガニス姫とともにアルガプラへと戻ることにした。

ところで、王宮のプンドポ (広間) ではお偉方たちはいまだに宴のなかで、盛り上がっていた。ヒルマン王子は酒に酔った状態で、王宮の中のカダルマニック姫の居室に近付いたが、姫は固く扉を閉ざしたままであった。侍女たちは恐れをなして、

あわただしくどこかへ逃げ込んでしまった。ただ1人の乳母がヒルマン王子を出迎え、カダルマニック姫は逢瀬の延期を望んでいるということを申し伝えた。ヒルマン王子はそれでもなお外から、姫に向かってわめき散らしたり、懇願し続けたりしたが、結局、愚痴をこぼしながらその場を去った。

カダルマニック姫がぜひにもルンガニス姫が来てくれることを心待ちにしていると、ルンガニス姫がケラン王子を伴ってやって来た。今度は、ルンガニス姫が外で控え、王子が部屋の中に入った。人々は、これは男性を装ったルンガニス姫であろうと思い込んだ。部屋の中の2人の様子はどうか知る由もないが、ケラン王子には貞節を汚す意思はなかった。その後、ケラン王子が部屋を出ると、しばらくしてからルンガニス姫が部屋に入っていった。ルンガニス姫がもとの女性の姿に戻ったのを見て、カダルマニック姫はいたく喜んだ。ルンガニス姫はそこで、このトリックを正直に説明したうえで、カダルマニック姫にケラン王子と結婚するよう告げた。さて、ヒルマン王子とも決着をつけなければならなかった。ヒルマン王子がまたやって来たが、すでに泥酔していた。王子は、わめき散らしながら、迎いの者を呼びつけた。そこでルンガニス姫は、カダルマニック姫のふりをして、ヒルマン王子に、まだお仕えする準備ができていないと伝えた。ヒルマン王子は落胆して立ち去った。ルンガニス姫は再びケラン王子とともにカダルマニック姫の部屋へ入ると、結婚のことを心置きなく話し合った。

ウォン・アグンはケラン王子の失踪とウマルマヤの死去について話題にした。そのことについて、マクトル (Maktal) 王子が詳細な説明を行った。そこで、アラブの軍隊にムカダム国を攻めるよう準備を整えさせた。

ヌルセワン (Nursewan) 王はムカダム国王に対して、自分がウォン・アグンの侵攻を警戒していることを伝えた。しかし、ムカダム国王はそれについてまったく一顧だにもしなかった。すでにアラブ軍を撃退するためにムカダムの軍隊は用意ができていた。鉄像でできた軍隊が用意されたのである。やがて鉄像の軍隊とアラブ軍と激突し、アラブ軍が敗北するという結果に終わった。

一方、毒の井戸に閉じ込められたウマルマヤは、ひたすらケラン王子の助けを待っていた。その頃、ケラン王子はルンガニス姫、カダルマニック姫とともに談義しているところであった。毒の井戸に閉じ込められているウマルマヤの境遇について人々が噂をしているのを聞きつけ、ケラン王子とルンガニス姫はウマルマヤのと

ころへ駆けつけた。そして、ウマルマヤは毒の井戸から助け出され、治療を受けた。その後、彼らはムカダム国へ向かうこととなった。木の枝に括りつけておいた雑囊も忘れずに持っていった。ウォン・アグンもウマルマヤに再会できることを心待ちにしていた。というのも、内心ではウマルマヤはまだ生きていると信じていたからである。

一方、ムカダム国の王とヌルセワン王はアラブ軍が全敗したのを祝して盛大な宴会を開いた。

ウマルマヤとルンガニス姫とケラン王子はウォン・アグンのもとに集っていた。そこで、ウォン・アグンのアラブ軍勢の全敗について話し合った。ルンガニス姫は、まずマジュシが持っている命の水の器を奪わなければならない、なぜなら命の水の器が彼のもとにある限り、鉄像の軍隊を壊滅することは不可能なのだ、とウォン・アグンに奏上した。そうしているうちに、負傷していた軍隊も皆回復した。軍勢はものを打ち囃して氣勢を上げた。ウォン・アグンの宿営地で打ち囃す音が湧きあがるの耳にしてヌルセワン王は心配になった。というのも、ウマルマヤが生還したのではないかと疑ったためである。ムカダム王は、ウマルマヤは確かに死んだのだと言って、ヌルセワン王の気を落ち着かせた。

アラブ軍はすでに用意を整え、ウマルマヤは家宝の帽子⁽⁵⁸⁾を被った。すると彼の姿は周りからは見えなくなった。彼は、ルンガニス姫と共にマジュシのいる場所へ向かった。ところが実は、このマジュシはルンガニス姫に思慕の念を抱いていたのである。これを知ったルンガニス姫は、命の水とその器を受け取ることを条件に、マジュシに仕えることを承諾した。器がルンガニス姫の手に渡ると、ウマルマヤがそれを割った。中の水はすっかりこぼれ出てしまった。そのせいでマジュシの霊力も失われたため、容易に捕えることができた。マジュシが牢獄に入れられると、アラブ軍は一斉に攻撃を開始した。鉄像の軍隊は滅亡した。ムカダム国王とヌルセワン王は城市に逃げ込み、大門を閉め切った。

さてここで、中国の姫ウィダニンガル (Widaninggar) に話は変わる。この姫は、ケラスワラ (Kelaswara) 姫との戦で命を落とした中国の姫アダニンガル (Adaninggar) の妹である。ウィダニンガルは姉アダニンガルの仇を討つため、ケラスワラ姫の息子であるケラン王子に復讐を企てていた。

ウィダニンガルは女性の軍隊を引き連れ、ムカダム国の王を手助けすべく、戦に

向かった。ところで、ウィダニンガルには女性の師匠がいた。イジャジル (Ijjil、悪魔) の娘で、名はウィダニルム (Widaningrum) といった。ウィダニルムは戦に向けての装備をウィダニンガルに与えた。それは、空飛ぶ船や異教の精霊などであった。この中国の姫がムカダム国に到着すると、ヌルセワン王とムカダム王に再び闘志が沸き立った。再び戦いの口火が切られた。ケラン王子が中国の姫と対峙したが、王子は敗北寸前となったところでルンガニス姫に助けられた。

中国の姫ウィダニンガルは師匠のウィダニルムと新たな攻撃について策を練った。中国の姫はウィダニルムを大変に尊敬していたのである。

ケラン王子も、ルンガニス姫、カダルマニック姫と作戦を話し合った。しかし、王子は、敵の軍が女戦士たちで構成されていることを知らなかった。

夜中に、ウィダニルムはウマルマヤの雑囊を盗みだし、「今こそ、その心から不安の念をぬぐい去るのです」と言って、中国の姫に渡した。

ウマルマヤの雑囊がなくなったことにアラブ軍の者たちは動揺を隠せなかった。そこで、ルンガニス姫はその雑囊を必ずや取り返すことを約束し、再び戦が始まると、みずからウィダニンガル姫に対峙した。ウィダニンガルが敗れると、ウィダニルムが進み出て、ルンガニスを打ち負かした。アラブの軍勢は次第に崩れ始めた。この間、ウォン・アグンは神の加勢を願って、ひたすら祈り続けていた。

目的を達することのできなかつたルンガニス姫は恥辱の念に駆られ、父の修行場に戻った。父からクライシン (Kuraisin) 姫に助けを請うよう助言を与えられ、ルンガニス姫は早速アジュラック (Ajrak) へ飛んだ。

クライシン姫は、父親に何かよくないことが起こっている気がして、心中穏やかでなかった。そこで、父ウォン・アグンの様子を知るために、おじのラ・ダサティル (ra-Dasatir) を使いに立てるところであった。そこにルンガニス姫がアジュラックに到着したので、クライシン姫は彼女と会うと、ただちにイスラームの聖霊たちを引き連れて、父を助けるため出発した。その頃、宿営地の四方が敵に取り囲まれ、ウォン・アグンはただ嘆き悲しむのみであった。そこにクライシン姫、ルンガニス姫、ラ・ダサティルの援軍が攻め込んだ。敵軍は総崩れとなり、ウィダニンガルは戦死した。ウィダニルムは縛られて遠方へ送られた。ヌルセワン王は逃走した。

こうしてクライシン姫とルンガニス姫はウォン・アグンにまみえることとなった。中国の女軍隊総勢 40 名の多くは降参し、イスラームに入信した。また、ウマルマヤ

の雑囊も見つかって元に戻った。ムカダム国の王も降伏し、イスラームに入信した。クライシン姫はアジュラックに戻り、ケラン王子はルンガニス姫とカダルマニック姫の両方を妻に迎えた。

ヌルセワン王は逃走を続けて、ヌサントラ (Nusantara) に至り、クンディット・ビラユン (Këndhit Birayung) 王に助けを請うた。

この『メナック・クンディット・ビラユン』の物語の筋は、すでに述べた物語の筋とほとんど同じである。数多く存在する『メナック・パン』の中でも、オランダ人のジャワ文学研究者によってその美しさを大いに評価されているのが本作品『ルンガニス』である。ただ、確かにこのような評価を得ているが、実際に良い部分は、ケラン王子とルンガニス姫の逢瀬を語る部分のみであり、それ以外の部分は、戦の場面を延々と語るばかりなので退屈である。

そんな中でもルンガニス姫の言動は興味深い。作者の描写は作り物のようではない。姫がケラン王に応じる言動も、魅惑的であって、はにかむようであり、相手の心をじらすのである。すぐ婚約に走ってしまう現代の若い女性たちも⁽⁵⁹⁾、少しこれを見習ってみても良いかもしれない。ケラン王子に関しても同様である。時にあたかも初めて恋をした青年のようであるが、相手に翻弄されることもしょっちゅうで、情熱的ではあるが決して怒りを表にだすことはなく、かえって恋の炎をひたらず燃やすのである。

この『ルンガニス』が魅力的であるもう一つの理由は、ケラン王子とルンガニス姫の逢瀬の描写において、『パンジ物語』のパンジ (Panji) 王子とアンレニ (Angrèni) 姫の逢瀬の描写を模倣していることである。このことから、『パンジ物語』が後代の作品に多大な影響を及ぼしていることが明らかといえる。

『ルンガニス』の作者はランガ・ジャヌル (Rangga Djanur) というカルタスラ宮廷の詩人であると言われている。その真偽は不明であるが、カルタスラ時代の作品であるということは、どこで誰によって書かれたかは措くとして、ほぼ確かなことである。言語の点では先に述べたカルタスラ版『メナック』にまだ近いものである。

58 マニック・マヤ⁽⁶⁰⁾

本作品もカルタスラ時代の作品であると言われている。また、作者はカルタムルサダ (Kartamursadah) という人物であると言われている。名前で末尾が「ah」で終

わるのは、通常、スンダ地方（Pasundan）の出身者の名前である。しかし、カルタムルサダがスンダ地方の出身者であるかは明らかでない。ただし、マタラム時代からカルタスラ時代の初めにかけて、ジャワのしきたりや言語を学ぼうとするスンダ人が数多くジャワの王宮の中心に居住していたという事実がある。また、プリアンガン（Priangan）⁽⁶¹⁾地方のブパティの子息や親類がジャワの王宮の中心に住み、王宮近くのウラマー（ulama）⁽⁶²⁾たちからジャワのイスラームを学んでいたという事実もある。したがって、カルタムルサダもまたプリアンガンのブパティの親族の1人で、カルタスラに住んでいた人物である可能性はある。

本作品『マニック・マヤ』の中には沢山の物語が収められている。ほかの作品と比較することなく観察するなら、この『マニック・マヤ』は意味深い物語を含んでいるようにも見える。しかし、すでに先に説明した『タントゥ・パングララン』と比較すると、本作品の物語は荒唐無稽であることが明らかである⁽⁶³⁾。というのは、本作品で語られている物語の大部分は、『タントゥ・パングララン』から引用したものに、当時のジャワに広まっていた民話が付け加えられたものだからである。しかも、『タントゥ・パングララン』からの引用は、はっきりとした内容の理解に基づいたものではなく、耳で聞いただけの口承に基づいたものである。

その証拠は以下に示すとおりである。以下がその証明である。『マニック・マヤ』の冒頭部では、まず世界の創世について語られている。次のとおりである。

Lumaksana sēkar sarkara'mrih, pininta maya maya'nggēng ulah, kang winarna pituture, duk masih awang-uwung, durung ana bumi lan langit, nanging Sang Hyang Wisesa, kang kocap rumuhun, mēnēng samadyaning jagad, datan arsa mosik jroning tyas maladi, ěning anēgēs karsa.

Amurwèng anggana'ngganya titis, titising driya tan ana kang lyan, pribadi datan asuwe, miyarsakēn swara sru, tan katingal uninya kadi, gēnthā sakala kagyat, sary'non antĕlu, gumantung nēng ngawang-awang, gya cinandhak sinanggèng asta pinusthi, dadya tigang prakara.

Saprakara dadya bumi langit, saprakarane teja lan cahya, Manikmaya katigane, kalih prasamya sujud, ing padane sang mahamuni, Sang Hyang Wisesa mojar, dhatēng Sang Hyang Guru, ěh Manik, wruhanireka, sira iku ananingsun

ingsun iki, èstu kahananira.

Ingsun pracaya sakalir-kalir, saisine jagat pramudita, sira wěnang
ndadèkake, (後略)

翻訳は以下のとおりである。

サルカラ（ダンダングラの別名）の韻律にのせて、その美しさが作品にあることを常に願う。主題となるのは、まだ虚空のみあって、天も地もまだ無かった時のことである。ただサン・ヒャン・ウィセサが、いにしえより、世界の中心にあって静寂の中にいたと言われている。心の深奥をかき乱すことなく、瞑想のなかで天啓を求めている。

自身を自らの内面に向かうように整え、心の対象を他ならぬ自身に向けていると、やがて大きな音が聞こえた。鐘のような正体の見えない音に驚いていると、3つのものが虚空から垂れ下がるのが目に入った。それを掴んで、手のひらの上に載せ、念じると、それは3つのものに変じた。

1つめは大地と天空になり、2つめは光と光線になり、3つめはマニック・マヤとなった。初めの2つは偉大なる聖者（サン・ヒャン・ウィセサ）の前に平伏した。サン・ヒャン・ウィセサはサン・ヒャン・グル（マニック・マヤの別名）に言葉をかけた。「マニック・マヤよ。知るがよい。お前は私であり、この私は実にお前なのだ。

私は、全世界の万物を創ることをお前に任せることにする…。(後略)

以上の部分は、明らかに『タントゥ・パングララン』からの引用である。ただし『マニック・マヤ』ではマニックがグル (Guru) 神に、マヤがスマル (Sěmar) になっているのである。

また、カネカプトラ (Kanekaputra、ナラダの別名) 仙の出現については第1章 29-30節で言及されている。また、ここで注目しておきたいのは、この物語と、後代の多くのジャワの作品に見られる、女神スリ姫をしつこく追い求め、妻としたカラ神の物語との関係である。この物語は後に多くのジャワの作品の中に取り入れられた。

たとえば、『パンジ・ジャヤクスマ』(Panji Jayakusuma)、『パンジ・アンレニ』(Panji Angrèni) の第 3 部、『ババッド・タナ・ジャウイ』(Babad Tanah Jawi) などである⁽⁶⁴⁾。

さらに、厄払い儀礼で扱われるバタラ・カラの物語⁽⁶⁵⁾も含まれている。また、揺れていたジャワ島がジャムルディパ (Jamurdipa) 山を載せたことで落ち着いたという伝承も含まれている。

要するに、『マニック・マヤ』に見られる事柄の多くが『タントウ・パングララン』からの引用である。その中でも新しく付け加えられたものと推測されるのがアジサカ (Ajisaka) の物語である⁽⁶⁶⁾。以下、第 2 部 9-10 節からの引用である。

Empu Brahmakēdhali sampun ayoga, wasta sang Anggajali, Anggajali putra,
jalu wus pinaraban nama Ĕmpu Sangka Adi, umasuk Islam, nyabat jengira
nabi. // Punika kang mēncarkēn aksara Jawa (後略)

翻訳は以下のとおりである。

ムプ・ブラフマ・クダリにはアンガジャリという息子があり、アンガジャリにはムプ・サンカ・アディという息子があつた。彼はイスラームに入信し、偉大なる預言者の親友となつた。// 彼こそが、ジャワ文字を広めた人物であつた。(後略)

物語はこのように続く。このムプ・サンカ・アディこそが後代のジャワの作品においてアジサカという名で呼ばれる人物である。物語はまだ他にもあるが、すべてを紹介するには多すぎるので、『マニック・マヤ』から一部を引用することにする。以下がその引用である (第 6 部 34 節-35 節)。

.... Sang Prabu Mēndhangkamulan, èngēt dhatēng wirayat kondur tan aris,
lawan sabalanira. // cèlèng kuthila samya bēriki, kang kacandhak gigire
karowak, saya sangēt palayune, prasamya rēbut dhucung sampun tēbih
praptèng jro puri, sri bupati sineba, pēpak punggawa'gung, jaka Puring anèng
ngarsa ... (後略)

翻訳は以下のとおりである。

.... ムンダン・カムランの王は忠告を思い出して、軍隊を引き連れて帰国した。// 猪と猿らは皆でそれを追いかけて、後ろから激しくぶつかった。早く走れば走るほど、追いつ追われつの状態であった。やっとのことで王宮に到着すると、彼らは王に拝謁した。周りは重臣たちで埋め尽くされていた。目の前にはジャカ・プリンが座っていた。(後略)

というように続く。上に示した部分は、明らかに以下に示すキラユ・ヌドゥン (kilayu nĕdhĕng) の詩からの引用もしくは表現の借用である。

Nĕmbang tĕngara, mundur sawadyane, nĕdya kundur jroning puraya; cĕlĕng kuthila, samya ambarisi, kang katrajang gĕgĕrira karowan. // sangsaya sangĕt palayuning bala, dadya rĕbut dhucung sampun atĕbih, praptĕng jro pura, sang nata sineba, pĕpak punggawa lir kilayu nĕdhĕng.//

翻訳は以下のとおりである。

警鐘が鳴ると、家臣を連れて撤退した。王宮への帰路、隊列を組んだ猪と鳥たちから攻撃を受けて騒然となった。軍の一行は足を速めて走り続け、追いつ追われつ、やっとのことで王宮にたどり着き、そこで王に拝謁した。その場には物々しく多くの家臣たちがそろっていた。

上にあげた2つのテキストのうちのいずれが先に成立したかを判別することは難しい。

スカル・アグン (sĕkar agĕng、長編の韻律詩) 形式の『マニック・マヤ』が先に存在したのか、あるいは『タントゥ・パングララン』がスカル・アグン形式に編集されたことがあったのか、これらの疑問に対して今のところは明確に答えることはできない。しかし、いずれにしても、『マニック・マヤ』は先に引用したアジサカの物語を除いて、預言者たちの物語を含んでいないことは明らかである。

『マニック・マヤ』は1852年に *Verhandelingen Bat. Gen.* 第24巻においてジャワ文字で出版されている (Hollander 1852)。オランダ語の解説は C. G. Winter によるものが *Tijdschrift van Ned. Indie* 第4巻第1号に収められている。

59 アンビヤ⁽⁶⁷⁾

一般的に『メナック』物語がマタラム時代もしくはそれ以前にジャワの地に入ってきたのと同時にアラブの様々な物語が伝播してきたと考えられている。その一つが『アンビヤ』である。

『アンビヤ』の中で語られることに、神による世界の創造のエピソードがある。まず初めに光が創られた。その光が強くなると、それが星となり、続いて水と泡になった。この泡がその後7つの天となるのである。話しはこのようにして続く。

また、神による預言者アダム (Adam)、そしてハワ (Hawa)⁽⁶⁸⁾の創造の話も語られる。やがてイブリス (Iblis、悪魔) が2人を誘惑したため、アダムとハワは地上に降り、ハワは子どもたちを産んだ。生まれた子どもたちはいずれも双子であった。子どもたちが成長し大人になると、アダムは彼らを結婚させようと望んだ。容姿端麗な者と不細工な者とを結ばせようとしたが、ハワはこれに異議を唱えた。ハワとしては容姿端麗な者は端麗な者同士、不細工な者は不細工な者同士を結ばせることを望んだ。この意見の食い違いが元となって、預言者シスが母を介さずして生まれたのである⁽⁶⁹⁾。

結果として、預言者アダムの子どもたちは、容姿端麗な子と不細工な子という組み合わせで結婚することになった。しかし、容姿端麗な男子の中には容姿端麗な女子を連れて中国大陸に逃げ出したものがいた。彼らはのちに偶像崇拝を行うようになった。

続いて『アンビヤ』では、ハビル (Habil) とカビル (Kabil)⁽⁷⁰⁾がある美しい女性を自分の妻にしようと対決する物語が語られる。結果としてはハビルがカビルによって殺された。そのためカビルは神によって天罰を受け、地下に引き込まれ、地獄に落ちた。

預言者アダムは天使ジャバライル (Jabarail) に助けられて仕事を学んだ。鍛冶職として様々な道具を作ったり、いろいろな食糧の種を受け取ったりした。

アダムは、連れ合いがいなかったシスにムラット (Mulat) という名の天女を妻として授けた。預言者アダムが死去したのちは預言者シスがカリフとしてその後を引き継いだ。シスが死去したのちは、アンワス (Anwas) —ピナット (Pinat) —ムタカ ril (Mutakalil) —マジッド (Majid。彼はイブリスの誘惑によって黄金の像を作り、崇拝の対象とする。) —サムダビル (Samudabil) の順に引き継がれた。サムダビ

ルは預言者イドリス (Idris) という称号を授かった。預言者イドリスは神に対して大変敬虔であった。そのため、天国に昇ると、地上界に戻って来ようとはしなかった。

イドリスが去った後、その子孫は金の像を造り、それを崇拜した。

預言者イドリスの子サレハ (Saleha) はサキル (Sakir) に代わられ、サキルはマリック (Malik、またはマサリック Masalik) に代わられた。マリックは後に預言者ヌフ (Nuh) ⁽⁷¹⁾ という称号を授かった。ヌフは異教徒に大変嫌われていた。世界が洪水に見舞われた時、ヌフはすでに一隻の船を用意していた。イブリス (悪魔) も船の中に入り込んだ。こうして預言者ヌフの子孫は各地に広がったのである。

他の預言者たちについて語られた後、ハビル (Habil) 国のナムルッド (Namrud) 王に関する物語が語られる。預言者イブラヒム (Ibrahim) ⁽⁷²⁾ の誕生についても語られる。預言者イブラヒムは成長して大きくなるとナムルッド王とその軍勢を平伏した。

その後、イブラヒムはサラ (Sarah) と結婚し1人の男子をもうけた。この子の名が預言者イスマンギル (Ismangil) ⁽⁷³⁾ である。物語はさらに進んで、最後にはザムザム (zamzam もしくは jamjam) の泉⁽⁷⁴⁾の成立について語られる。

要するに、『アンビヤ』は預言者たちの伝承を語ったものに過ぎない。ただ、預言者シスの息子で(ジャワの)神々の祖だと言われているサイド・アンワル (Said Anwar) はまだ含まれていない⁽⁷⁵⁾。

『アンビヤ』は、現に存在する文献を含めそのすべてがスラカルタ時代初期に創作されたと考えられている。しかし、この物語がジャワに伝播したのはそれよりも前の時代であることは確かである。おそらくカルタスラ時代よりも前の時代であったと推測される。

60 カンダ⁽⁷⁶⁾

言語の揺れや表現から判断して、本作品『カンダ』は明らかにカルタスラ時代の作品である。作品の中で語られる物語は多彩である。なぜならば、この『カンダ』の中では、ジャワ由来の物語とイスラーム由来の物語が混じり合っているからである。ここではそれを明らかにするために、いくつかの物語から必要な部分のみを引用し以下に紹介する。

『カンダ』の物語の冒頭は、預言者アダムにすでに大勢の子があるところから語り始める。預言者アダムの望みは、容姿端麗な子と不細工な子を結婚させようというものであったが、ハワの望みはこれに反して、容姿端麗な子同士を結婚させようというものだった。息子のカビルは父アダムの決めたことに従いたくなかったので、兄のハビルを殺してしまった。その上、ハビルの婚約者であった容姿端麗な女性を奪い、自らの妻にしてしまった。

そののち、カビルはイブリス（悪魔）の弟子になった。このイブリスは自らを神とみなし、マニック・マヤと称していた。マニック・マヤの命令で、カビルはブミ・カチャ（Bumi Kaca）に赴いた。そこでカビルは2人の子供を得た。1人は女兒で名をダリヤ（Daliyah）といい、もう1人は男児で名をダビル（Dabil）といった。2人の子が大きくなると、カビルは父である預言者アダムを訪ねたいという思いを強くした。メッカに到着すると、さっそく預言者シスの家に向かった。折しも預言者シスは家を留守にしており、そこにいたのは身ごもっているシスの妻だけであった。シスの妻は、預言者アダムの呪いを受けるのを恐れて、カビルを中に通そうとはしなかった。そこで、カビルは、その妻から生まれてくる子を、将来、自分の子供の配偶者にするということを伝えた。

旅を続けるカビルであったが、やがて神の天罰を受け、地が裂けて地獄に引き込まれてしまった。

さて、預言者シスの妻は男児を出産した。父親である預言者シスによってすでに名前が用意されていたのだが、その子は気に入らず、代わりに自らヌルチャヒヤ（Nurcahya）⁽⁷⁷⁾という名を選んだ。預言者シスはそれに激怒し、ヌルチャヒヤを追い出してしまったため、ヌルチャヒヤはあてもなく家を出て行くことを余儀なくされた。そこで、彼はマニック・マヤという称号を持つイブリス（悪魔）と出会った。ここでイブリスはヌルチャヒヤの信奉を強めるために、彼を7つの天国⁽⁷⁸⁾に誘った。ヌルチャヒヤの方も、彼に教えを乞うたのである。

そのとき、ヌルチャヒヤは気を失うまで顔を引っ叩かれた。気を失った後、胸を開かれ、臓物をすべてひっくりかえされ、しまいには小便をひっかけられた。その時、ヌルチャヒヤはメッカにいる家族のことなど忘れてしまった。そして、ヌルチャヒヤは、ブミ・カチャへ赴き、そこでカビルの子どもたちといっしょになり、ダリヤと結婚するよう命じられた。

さて、アダムにはカルカ (Kalkah) という名の息子がいたが、すでにこの世を去っていた。カルカはハンピヤ (Hampiyah) という名の娘を後に残していた。この子の母親もすでに他界していたので、孤児となったこの子は、祖父のアダムが育てていたので。

ある夜、ヌルチャヒヤはハンピヤを説得するために彼女のもとを訪れた。ハンピヤは説得されるとヌルチャヒヤについてブミ・カチャに行ってしまった。

マニック・マヤは僧侶に変身してブミ・カチャを訪れていた。マニック・マヤはダビルに対し、その父カビルはシスによって殺されたのだと伝えた。これを聞いたダビルはシスに対し復讐の念を抱いたのであった。

ブミ・カチャへ着いたヌルチャヒヤはダリヤと結婚した。また、ハンピヤはダビルの妻となった。ヌルチャヒヤは人々に推されて王となり、ダビルはその宰相に就任した。

マニック・マヤは、ヌルチャヒヤに、アダムとシスが死んだあかつきには、恨みを晴らすためメッカに侵攻し、アダムの宗教を壊滅させて自身の宗教を広めるよう命じた。

ヌルチャヒヤは1人の男児を得た。その名はヌラサ (Nurrasa) といった。ダビルの妻も双子を生んだ。その1人は男児でもう1人は女児だった。

その女児に乳を与えて育てたのは、ヌラサの母 (ヌルチャヒヤの妻) であり、やがて、その女児はヌラサと結婚することになった(《原註》本来なら、同じ乳で育った子供同士が結婚することは禁忌である)。やがて大きくなったのち、ヌラサは同じ乳で育ったきょうだい (上記の女児) と結婚した。

双子のもう一方の男児はビリ (Bilik) と名付けられた。のちにビリはハルマヒル (Halmahil) という名の重臣の娘であるタルシア (Talsiyah) と結婚した⁽⁷⁹⁾。

やがて、アダムが死去したという知らせが広がった。ダビルがヌルチャヒヤのもとに参上して、今こそメッカを攻める時だと進言したが、当のヌルチャヒヤはマニック・マヤをまず待つことにした。

ほどなくして、マニック・マヤがやってくると、ヌルチャヒヤに対して、その息子ヌラサを王位に就かせるよう、また、ヌルチャヒヤは僧侶となるよう命じた。ダビルに対してはメッカを攻めるよう命じた。ヌルチャヒヤはジャミルイマン (Jamiliman) にあるマニック・マヤの宮殿に置かれた。この宮殿に住む者は、たと

えどんな重病を患ったとしても、決して死ぬことはないという。ダビルは息子の嫁の父親（ハルマヒル）とともに出陣してメッカを攻めた。イスラーム教徒には元の宗教に戻るよう説得が行われた。

メッカの王はシスの子で、名はアワス（Awas）であった⁽⁸⁰⁾。この王は自らの息子ラヒル（Rahil）に命じ、異教徒に対する聖戦を行うために民衆を動員させた。戦闘が始まると、異教徒の軍勢が敗北し、ダビルとハルマヒルは戦死した。

アワスは王位を退くと王国の統治を息子ラヒルに委ね、その後しばらくして死去した。

メッカ侵攻が失敗に終わったとの報告を受けたヌルラサは、民衆に対して、瞑想を行ってマニック・マヤ（イブリス）を呼び出すよう命じた。マニック・マヤが現れると、ビリの長男フフッド（Huhud）を王位に就かせた。そして、ヌルラサとその2人の子、そしてビリには自身の王宮に来るよう命じた。一行がマニック・マヤの王宮に着くと、ヌルラサの2人の子のうちの1人は、マニック・マヤに代わって神々の世界（kayangan）の王として王位に就かされ、サン・ヒャン・ウナン（Sang hyang Wĕnang）という称号を与えられた。もう一方の子は、姿かたちが不細工であったため、サン・ヒャン・ウナンの家僕とされ、サン・ヒャン・トゥンガルという名を与えられた。

その他の靈力に関して言えば、サン・ヒャン・トゥンガルの方がサン・ヒャン・ウナンを上回っていた。

ビリクは、サン・ヒャン・ウナンの王宮がある丘のふもとに位置するアジャミンラット（Ajamingrat）という地において、王位を拝命し、タムフッド（Tamhud）という称号を与えられた。また、タムフッドの兄弟の1人は宰相に起用された。その名はカネカジャム（Kanekajam）といった。

マニック・マヤ（イブリス）はサン・ヒャン・ウナンに対して、もし宗教に敬虔な者があれば、必ず天国（kesorga, kayangan）に入れてやらなければならないと告げた。

サン・ヒャン・ウナンはアジャム（Ajam）の山で王となった。その国では、人々はジン（jim, jin）や魔霊（setan）と混じり合って住んでいた。

ヌルラサは、マニック・マヤに従って、その誘いに応じて世界を巡回した。預言者アダムの墓を訪れると、アダムの宗教が地上から消え去るよう墓は壊されること

になっていた。マニック・マヤとヌラサは、呪いを受けて、強い風によって自国に吹き飛ばされてしまった。ヌラサはアダムの呪いを受けたのだった。その身体は骨まで真っ黒になってしまった。

サン・ヒャン・ウナンはビリクの末子と結婚していたが、サン・ヒャン・トゥンガルのほうはいっこうに結婚しようとしなかった。サン・ヒャン・ウナンは女兒を得た。その名をニラティ (Nirati) といったが、容貌は大変に不細工であった。さらに、新たに男児を得て、スンバ (Sumba、あるいはサンブ Sambu) と名付けた。

このサンブには4本の腕があった。このサン・ヒャン・ウナンの子が4腕なのは、サン・ヒャン・トゥンガルの呪いを受けたことが理由であった。というのも、サン・ヒャン・ウナンは結婚においても、子をもうけることに関してもサン・ヒャン・トゥンガルに先んじたからなのである。自分の誤りについて、サン・ヒャン・ウナンはサン・ヒャン・トゥンガルに対して謝罪し、サン・ヒャン・トゥンガルはサン・ヒャン・ウナンを許した。

やがてサン・ヒャン・ウナンの妻はもう1人女兒を出産した。この子はジャワの外における物語によればシティ (Siti) 姫と呼ばれるが、ジャワの物語によればシンタ (Sinta) 姫と呼ばれる。また、シンタ姫に続いて生まれた女兒はジャワの外における物語によればラディ (Ladi) 姫、ジャワの物語によればランドゥップ (Landěp) 姫と呼ばれる⁽⁸¹⁾。

マニック・マヤは世界がやがて破滅するという知らせを耳にした。預言者ヌフ (ノア) の宗教を奉じない者は皆、大洪水に呑み込まれて死ぬというのである。そこで、マニック・マヤはサン・ヒャン・ウナンとサン・ヒャン・トゥンガルのところにやって来て、彼の信徒たちをすべて取り込んで、自分の体の中に入れると伝えた。宮殿も丘もその上にあるものもすべて同様に取り込むというのである。その理由は、世界は破滅を迎え、大地は大洪水に呑み込まれるが、世界が清浄な状態になったとき、再び建て直すことを望むからだという。

サン・ヒャン・ウナンはこのマニック・マヤの言葉に従った。そこで、マニック・マヤはアジャミンラットに住むタムフットに会いに出かけた。タムフットにはすでに女兒がおり、その名はウマ (Uma) といった。その他にラトゥグナ (Ratugěna) という男児とバユ (Bayu) という女兒がいた。

宰相カネカジャムにもまた2人の男児があり、兄の名をパンガット (Pangat)、弟

の名をガリティ (Gariti) といった。

彼ら一同に会うと、マニック・マヤはすべてを巻き込んで自分の体の中に取り込んでしまった。マニック・マヤにこのようなことができたのには次のような理由がある。かつてマニック・マヤが天使の座から放逐されたとき、マニック・マヤは神に対して靈力を授かることと、預言者アダムの子孫を誘惑する許しを請うた。神はそれを承諾して、「望むままに」と言ったのである。

マニック・マヤはその体に必要なものをすべて取り込むと、ヌフに会いに出かけた。ヌフはすべての種類の動物から1つがいつ船に乗せているところであった。その時、イジャジル (Ijajil、「悪魔」の意。マニック・マヤのこと) がロバの尾にしがみついたので、ロバは船に乗ろうにも前に進めなかった。ヌフはついに癩癩を起こして「この悪魔め、早く乗れ」と罵った。驚いたロバは船に飛び乗ったのだが、悪魔 (マニック・マヤのこと) もそれについて船に乗ったのだった。

やがて水が退いた後、マニック・マヤはアジャル・イマムの丘へ戻った。そこで、体の中に取り込んでいた人々や物をすべて外に出した。サン・ヒャン・ウナンは、王位を退き、息子のサンバ (Samba、スンバあるいはサンブ) に王国を譲るよう命ぜられ、その息子には、バタラ・グル (Batara Guru) という名とサン・ヒャン・ジャガット・カラナ (Sang Hyang Jagat Karana) という称号が授けられた。サン・ヒャン・ウナンは、権威こそバタラ・グルに譲ったものの、いまだ実権を握っていた。その後、グル神は、王宮がある山を引き抜いて、それをジャワ島に運ぶよう命じられた。サン・ヒャン・ウナンの方はアジャム・イマンに留まった。

カネカジャムの息子パンガットはのちにナラダ (Narada、別名カネカプトラ Kanekaputra) 仙になったと言われている。

以上が『カンダ』からの引用であるが、これで十分であろう。骨子は、預言者アダムの子が預言者シスであり、シスの子がアワスであるということである。このアワスは、ジャワの物語で言うサイド・アンワス (Said Anwas) であり、聖書で言うエノス (Enos) である。

しかし、『カンダ』にはサイド・アンワルはいまだ登場しない⁽⁸²⁾。預言者シスは息子ヌルチャヒヤを得て、このヌルチャヒヤこそがジャワの神々の祖となるのである。

ヌルチャヒヤは息子ヌラサを得、ヌラサは2人の息子サン・ヒャン・ウナンとサン・ヒャン・トゥンガルを得た。サン・ヒャン・トゥンガルは後にスマルにな

る。サン・ヒャン・ウナンは息子サンブを得る。サンブ（もしくはスンバ）は後にバタラ・グルになる。このバタラ・グルは4つの腕を持ち、サン・ヒャン・ジャガット・クラナという称号を持っていた。したがって、『カンダ』によれば、サン・ヒャン・トゥンガル（スマル）はバタラ・グルのオジということになる。

『マニック・マヤ』によると、マニックとマヤは後にバタラ・グルとスマルになる。一方、『カンダ』によると、マニック・マヤはイブリスもしくはイジャジル（どちらも悪魔の意）の名である。

ここで、私から疑問を呈したい。ジャワ人は、これらの作品を読み、作品同士を比較したとき、どうして困惑しないのであろうか。どうしてジャワの物語はアラブの物語と混じり合えたのだろうか。これはただ、神々をイスラームの指導者すなわち預言者たちの下に位置付けるための方策であったということである。

すでに先に述べたように、まずジャワ人の土着の「神」はインド人の「神」すなわちシワ神によって押しつけられた。そしてジャワ人の元来の「神」はヒンドゥー・ジャワ時代のあいだ、すなわちマジャパヒト時代の終わりまで、まったく押し込められていたのである。しかし、ヒンドゥーの影響が薄れてやがて消滅すると、ジャワ人の本来の「神」が再び現れ、ヒンドゥーの「神」の上に置かれるようになった。つまり、サン・ヒャン・タヤ (Taya)、サン・ヒャン・ウナン、サン・ヒャン・トゥンガルといった「プリアイ」たちがシワ神（バタラ・グル）の上に置かれるようになったのである⁽⁸³⁾。

イスラームの時代になると、バタラ・グルの位置がずらされ、サン・ヒャン・ウナンやサン・ヒャン・トゥンガルなどは分けられて、預言者アダムの下に置かれることになったのである。この説が正しいかどうかの判断は読者に委ねたい。

『カンダ』の物語はまだ続きがある。その骨子は、物語はまず、バタラ・ブラマ (Brama) の子孫、すなわち、ブラマサダラ (Bramasadara)、ブラマ何某、ブラマ何某について語る。

その後に、ワヤンの演目のうち古いもの、例えば「アルジュナサスラ」(Arjunasasra)、「スグリワとスバリ」(Sugriwa Subali)、「ジャタスラとマエサスラ」(Jatasura Maesasura) などについて語られる。続いてマレー語の『ヒカヤット・スリ・ラマ』(Hikayat Seri Rama) から引用されたラーマ物語が語られる。ただし、ヤサディプラ (Yasadipura) 作のラーマ物語のモチーフとなった物語は、この作品の中ではまった

く語られていない。『カンダ』のラーマ物語は、後にジョグジャカルタを中心に広まったラーマ物語である。この物語は、シンタがダサムカ (Dasamuka) 王の娘であり、アノマン (Anoman) がラーマとシンタの息子であるといった内容である⁽⁸⁴⁾。

これに続いて、通常のワヤンの演目が語られている。しかし、本来なら上に述べたような事柄を含むはずの部分は、ジャカルタ博物館所蔵の文献には収録されていない。それらの文献は博物館に収められる前に消失してしまったということであろう。

これは決して驚くべきことではない。というのはワヤンの演目を含んだ部分というのは一般に人々に人気があったからである。そのため、その部分は頻繁に貸し借りがされるうちに失われてしまったか、または、多くの人に読まれ、複写が作られる前に破損してしまったのであろう。

『カンダ』の続編にあたるものが現存している。これらの物語は「ブラタユダ」(Bratayuda) の終わりからジャカ・ティンキル (Jaka Tingkir) の物語まで触れている。この中に含まれていないような物語はまずない。当時知られていたほとんどの物語がこの中に入っているのである。

本作品『カンダ』においては、一つ一つの出来事にスンカラを用いた年号の記述がなされているが、スンカラだけであって、まだ完璧なものとは言えない。後代の『プスタカ・ラジャ』(Pustaka Raja) においてスンカラは完璧なものになって、「チャンドラ・スンカラ」(Candra Sengkala、太陰暦クロノグラム) と「スルヤ・スンカラ」(Surya Sengkala、太陽暦クロノグラム) の両方が用いられている。これについては次章で解説する。

註

- (1) サイトの URL : <https://www.sastra.org/bahasa-dan-budaya/pengetahuan-bahasa/1639-kapustakan-jawi-purbacaraka-1954-172-6-jaman-islam>
- (2) 原題はオランダ語で *Het boek van Bonang* (「ボナンの書」) である。これはスナン・ボナンの著作に仮託されてきたことによる。Drewes (1969) による新しい校訂テキスト、英訳、解説が出版されており、それに従って現在では『セ・バリの教え』(*The Admonitions of Seh Bari*) の名で知られている。
- (3) シャイフ (*shaykh*) はアラビア語で「長老、年輩者」の意。ジャワ語のテキストではバリ (*Bari*) の敬称として *sek*, *sekh*, *shekh* と表記される。
- (4) 原文の *wirasaning usul suluk* を Drewes (1969: 13-14) に従って「神秘主義の基本の意味」と訳した。ここでの *suluk* はアラビア語の *sulūk* が起源で「旅人が神を目指し上昇していく霊的・心的な道筋」の意。ジャワ語起源の *suluk* とは区別が必要である。註 10 を参照。
- (5) イスラーム神学者ガザーリー (*Ghazālī*, 1058~1111 年) が著した古典的スーフイズムの集大成。
- (6) インドネシア語版ではタウヒド (*Tauhīd*, 「神の唯一性」の意) となっているが、ジャワ語版および Drewes (1969) に従ってタムヒド (*Tamhīd*, 「序論」の意) に訂正した。タムヒドを書名とする古典イスラーム教学の文献には複数あり、そのいずれを指すかは不詳である (Drewes 1969: 14)。
- (7) 原題はオランダ語 (表記は原文のままとしている) で *Een Javaans Geschrift uit de 16e eeuw* (「16 世紀のジャワの文献」) である。Drewes (1954) による新しい校訂テキスト、オランダ語訳、解説が出版されており、それに従って現在では『16 世紀のジャワのプリンボン』(*Een Javaanse Primbon uit de Zestiende Eeuw*) の名前で知られている。プリンボン (*primbon*) は、現代ジャワ語では占いの類に限定されて使われることが多いが、ジャワの初期イスラーム時代には、韻文のスルックとともに、イスラームに関する諸知識を扱う散文文献の総称として使われた (Uhlenbeck 1964: 123)。
- (8) 《原註》原文では *punapa kang atus saking wêsi; rangkêp kaliyan watu* と表記されている。
- (9) ジャマニラ地獄 (*naraka Jamanirah*) がどのような地獄かは不明である。なおインドネシア語版では「ジャマニラ地獄より怖いものは何か」となっているが、ジャワ語のテキストは *atis* 「冷たい」なので、本文のように訳出した。
- (10) 原題は *Suluk Sukarsa* である。インドネシア語版では *Suluk Sukarasa* となっているが、ジャワ語版に従って *Suluk Sukarsa* に訂正した。写本については Pigeaud (1967-70, 1: 87) を参照。ここでのスルック (*suluk*) はジャワ語起源の語で、マチャパット韻律で書かれたイスラーム神秘主義を主題とする詩の総称。アラビア語起源の *sulūk* とは区別が必要である (Pigeaud 1967-70, 1: 85)。
- (11) 原書の第 3 章第 42 番『デワ・ルチ』を参照。
- (12) 本書では『デワ・ルチ』を非イスラーム文献に分類しているが、ジャワ社会において『デワ・ルチ』が伝統的にイスラーム文献として受容されてきたことの意義を強調する意見もある (Florida 1995: 260)。
- (13) 《原註》簡潔に例示するためにここでは 8 音節×8 行の形式に編集した。
- (14) 原文の *tan ana irêng ing pëthak* を「白における黒」と訳した。スーフイーにとって書物は単なる白い紙の上の黒いインクの集合ではないという意味であろうか。
- (15) 原文の *sagara ora* を「非存在の海」と訳した。
- (16) ハムザ・パンスリ (*Hamzah Pansuri* または *Fansuri*, 1590 年頃没) はスマトラの

- バルス (Barus) 出身のスーフイーの著作者。マレー語の韻文および散文の作品が残されている (Drewes and Brakel 1986)。引用された詩は「船の詩」(Syair Perahu) として知られる。
- (17) 《原註》Illa は La ilahaila'llah を表す。《訳注》これはイスラームの信仰告白の前半「アッラーの他に神は無し。」の部分である。後半は「ムハンマドはアッラーの使徒なり。」と続く。
- (18) 《原註》Dr. J. Doorenbos, *De Geschriften van Hamzah Pansuri*, pp. 18-19 (Doorenbos 1933)。
- (19) パワン (pawang) は専門分野にかかわる呪術の知識をもつ職能者のこと。
- (20) ジュル・バトウ (juru batu) は測深や錨の操作を担当する船員のこと。
- (21) マチャパット (macapat) は伝統的な韻律形式の総称である。ダンダングラ (Dhangdhanggula) やミジル (Mijil) などの形式がある。形式ごとに 1 詩節の行数、各行の音節数、行末の母音が定まっている。
- (22) 原題は Kojajajahan である。写本については Pigeaud (1967-70, 1: 107) を参照。
- (23) バサント (Basanta) は古ジャワ語で「春」の季節のこと。雨季が始まり樹木がいっせいに開花する季節とされる。
- (24) サルカラ (sarkara) はジャワ語で「砂糖」の意だが、ここでは韻律形式のダンダングラ (Dhandhanggula) の別名。gula が「砂糖」の意であることに由来する。
- (25) インドネシア語版では「南東の風」(angin tenggara) と記されているが、ジャワ語原文の wya-wya は「北西」を意味する wāyawya (bāyabya) の異表記と解釈できるので、「北西の風」と訳した。11 月頃に始まるジャワ島の雨季は北西のモンスーンがもたらすから、バサントがもたらす風としてはこの解釈の方が適切である。
- (26) ヌサントラ (Nusantara) は古ジャワ語で「(ジャワ島の外の) 島々」の意であるが、現代ジャワ語では現在のインドネシアを指すこともある。ここではエジプトと対比して「(ジャワを含む) インドネシア」と解釈しておく。
- (27) インドネシア語版ではプランタラという地名と解釈しているが、ジャワ語原文の purantara は「他の国々」を意味するので、ここでは「異国の地」と訳した。
- (28) パナラガは現在の東ジャワ州ポノロゴ (Ponorogo) 県にあたる地域。東ジャワ州の南西部に位置し中ジャワ州と境を接する。
- (29) ギリ (Giri) は東ジャワのグレスック西方の丘陵地。ジャワにおけるイスラーム定着の初期の中心地であり、イスラームの布教に貢献したスナン・ギリ (Sunan Giri) の聖廟がある。原著者は、ギリが「山」の意味であり、『コジャ・ジャジャハン』に見えるパルワタ (parwata) も「山」の意味であることから、パルワタがギリを暗示していると解釈している。
- (30) 原題は Suluk Wujil である。テキストとオランダ語訳には Poerbatjaraka (1938) がある。
- (31) ジャワの宮廷では王の権威を高める存在としてこびとが下僕として仕えることがあった。
- (32) これらの作品についてはそれぞれ原書の第 5 章第 42 番と第 7 章第 66 番、第 3 章第 34 番、第 6 章第 49 番を参照。
- (33) スンカラ (sēngkala) はジャワの年号表示法(クロノグラム)。サンカラ (sangkala) とも表記する。単語と数字が対応しており、並んだ 4 つの単語を右から左に読むことでサカ暦の年号を示す。
- (34) 原題は Malangsumirang である。テキストとオランダ語訳には Drewes (1927) がある。
- (35) ジャワ語版では「1931 年 12 月」となっている。正確な書誌情報を見つけることはできなかった。

- (36) 原題は Nitiruti である。写本については Pigeaud (1967-70, 1: 105-106) を参照。
- (37) 原書の初版が 1952 年に出版されているので、およそ 1900 年頃のことにあたる。ただし、原文がなぜこの時期を「スラカルタ時代」と記述するのかは不詳である。
- (38) パジャン (Pajang) はスラカルタ市の西部にある地域。
- (39) ジャカ・ティンキルはドゥマックの家臣としてパジャンを治めたが、1546 年頃のドゥマック王トルンガナの死後、独立した勢力となり、1584 年頃にパジャン王を称した。しかし、1587 年にマタラムのセナパティに攻められて死亡した。
- (40) パサル・クリウォン (Pasar Kliwon) はスラカルタ市の中心部にある地域。
- (41) いずれもヒンドゥー・ジャワ暦による。8 年の周期で 1 ウィンドゥを構成し、ワウはウィンドゥの中の 7 番目の年を指す。さらに 4 ウィンドゥの一つの周期を構成し、サンチャヤは 4 番目のウィンドゥを指す。アシュラは一般にヒジュラ暦の第 1 月であるムハラム月の第 10 日を指すが、「アシュラの月」という表現は不詳である。
- (42) この文は、インドネシア語版に錯誤があるので、ジャワ語版に従って訳した。
- (43) Wibisana は『ラーマーヤナ』に登場する羅刹王ラーヴァナの弟ヴィビーシャナのこと。羅刹でありながら正しい心の持ち主として知られる。本書第 1 章第 2 番『ラーマーヤナ』を参照。
- (44) 散文の現代ジャワ語訳はスラカルタ宮廷の詩人ロンゴワルシト (Ranggawarsita) によるものである (Pigeaud 1967-70, 1: 106)。
- (45) 原題は Nitipraja である。写本については Pigeaud (1967-70, 1: 105-106) を参照。
- (46) ブパティは地方領主のこと。前近代のジャワでは王の下にあって領民を支配した。現代インドネシア語では「県知事」の意。
- (47) mangsa はジャワの伝統的な太陽暦に基づく月。12 か月で 1 年を構成する。第 4 月は 9 月中旬に対応し、雨季が始まる時期である。
- (48) 原題は Sewaka である。写本については Pigeaud (1967-70, 1: 108) を参照。
- (49) パク・ブウォノ 1 世はマタラム王国の王 (在位 1704~19 年)。即位前の名はプグル王子。
- (50) マンクラット 2 世はマタラム王国の王 (在位 1677~1703 年)。この王の時にカルタスラに遷都した。
- (51) 《原註》より古いテキストでは sadarum ではなく sabda'rum uni manis となっており、kulanana sabda'rum「甘い言葉で称えよ」の意になる。しかしながら、sadarum には「すべて」という意味がある。これはカウイ (kawi) 語の sadya に由来する考えられる。《訳註》カウイ語とは、一般に古ジャワ語に起源をもつ、ジャワ語における雅語のことである。
- (52) 原題は Menak である。起源は『アミル・ハムザの冒険』(Dastan-e-Amir Hamza) の名で知られるペルシャ語の叙事詩で、南アジアおよび東南アジアに伝播した。題名のアミルはアラビア語で「将軍」を意味する称号、ハムザ (次の註を参照) は実在の人物の名であるが、物語は空想的な内容である。東南アジアへの伝播については Ronkel (1895) を参照。『マレー年代記』(Sejarah Melayu) には 1511 年のマラッカ陥落前夜に兵士たちがアミル・ハムザ物語を朗唱して士気を鼓舞する場面が描かれている。マレー語版のテキストとしては A. Samad Ahmad (1987) がある。ジャワ語版については Poerbatyaraka (1940) を参照。写本については Pigeaud (1967-70, 1: 212-215) を参照。
- (53) このアンビヤは、歴史的にはハムザの名で知られるムハンマドの叔父 (570~625 年) のこと。ムハンマドの軍隊を率いて戦役に功績があった。ジャワではアミル・アンビヤ、メナックの名で知られる。ちなみに、インドネシアを代表する著名な詩人に同名のアミル・ハムザ (1911~1946 年) がいる。

- (54) ヌシルワン (Nusirwan) とともに表記される。
- (55) パン (pang) はジャワ語で「枝」のことで、母体となる物語から派生した物語を指す。
- (56) 原題は Rēngganis である。写本については Pigeaud (1967-70, 1: 215-216) を参照。
- (57) この部分は、インドネシア語版では意味を取りにくいので、ジャワ語版に従って訳した。
- (58) 帽子 (kopiah) はイスラーム教徒の男性用帽子のこと。ソンコック (songkok)、ペチ (peci) と呼ばれる。
- (59) 原文の「perlup-perlupan」を仮に「婚約にすぐ走ってしまう」と訳した。
- (60) 原題は Manikmaya である。テキストとしては Hollander (1852, 1865) がある。写本については Pigeaud (1967-70, 1: 153-154) を参照。本書で示されている『マニク・マヤ』の著者をスンダ出身とし、内容には『タントウ・パングララン』と密接な関係があるとするブルボチャロコの主張には異論もある (Pigeaud 1967-70, 1: 154)。
- (61) プリアンガンは西ジャワの山地地域のこと。民族的にはスンダ人が多く住む。
- (62) 本来、イルム (知識・科学) を所有する者の意であるが、イスラームの法や神学に通じた者も指す。
- (63) 『タントウ・パングララン』については原書の第 4 章第 37 番を参照。
- (64) 『パンジ・アンレニ』については原書の第 5 章第 45 番を参照。『ババッド・タナ・ジャウィ』については深見 (2012) を参照。
- (65) ジャワ語でルワタン (ruwatan) と呼ばれる厄払いの儀礼では、災厄の象徴であるバタラ・カラが登場する特別なワヤンの演目「ムルワカラ」(Murwakala) を上演する。
- (66) アジ・サカ (Aji Saka) はジャワに文明をもたらした伝説上の王。ハナチャラカ (Hanacaraka) と呼ばれるジャワ文字の創始者ともされる。
- (67) 原題は Ambiya である。クルアーンに言及されるアダムを初めとする過去の預言者たちにまつわる伝説を集成した物語である。ジャワ語の Ambiya (マレー語の Anbia) はアラビア語で「預言者」を意味する nabi の複数形 anbiya' に由来する。したがって、原書の表記は Ambiya であるが、アラビア語表記に近い Anbiya とともに表記される。ジャワでは Tapël Adam の別名でも知られている。『アンビヤ』は後にヤサディプラ (Yasadipura) によって翻案された (原書の第 7 章第 68 番を参照)。写本については Pigeaud (1967-70, 1: 129-131) を参照。
- (68) ハワはキリスト教のイヴ (エヴァ) に対応する。
- (69) シスはキリスト教のセト (セツ) に対応する。セトはアダムとイブの 3 番目の息子である。
- (70) ハビルとカビルはキリスト教のアベルとカインに対応する。2 人はアダムとイブの最初の子どもたちで、カインが兄、アベルが弟である。
- (71) ヌフはキリスト教のノアに対応する。
- (72) イブラヒムはキリスト教のアブラハムに対応する。
- (73) イスマンギルはキリスト教のイシュマエルに対応する。イブラヒムと妻サラの子イサクがユダヤ人の祖先であるのに対して、イブラヒムと側妻ハガルの子イスマンギルはアラブ人の祖先とみなされている。このため、イスラームの伝統にもとづく『アンビヤ』においてもイスマンギルに焦点が当てられている。原書でイスマンギルをサラの子としている理由は不詳である。
- (74) メッカにある泉。イブラヒムの側妻ハガルとその子イスマンギルが荒野に放逐されたとき、神が天使を遣わして出現させた泉とされる。メッカの水源であるばかりでなく、イスラーム教徒にとって聖水とみなされている。

- (75) アンワルはシスの2人の息子の1人であり、アンワスの兄弟である。ジャワの伝承ではこのアンワル(別名ヌルチャヒヤ、Nurcahya)がジャワの神々(dewa)の祖先とされる。次節『カンダ』の記述を参照のこと。なお、原文では Sayid Anwar と表記されているが、Sayid は預言者ムハンマドの子孫に付けられる称号なので、厳密に言えば時代錯誤である。
- (76) 原題は Kandha である。ジャワ語で「物語」の意。原書の第7章第79番に記載されているロンゴワルシトの著作『パラマヨガ』(Paramayoga)はこの『カンダ』を下敷きにして著者が独自に大幅に加筆した作品である(豊田 2017)。写本については Pigeaud (1967-70, 1: 138-143) を参照。
- (77) ヌルチャヒヤは前節の『アンビヤ』に登場するアンワルの別名である。
- (78) クルアーンには7つの天が存在すると記述されている。
- (79) この部分は、インドネシア語版では意味を取りにくいので、ジャワ語版に従って訳出した。
- (80) アワスは前節の『アンビヤ』に登場するアンワスに対応する。
- (81) 《原註》これはウク暦(pawukon)の伝承のもとになっている。《訳註》ウク暦(pawukon)とは、7日からなる30の「週」(ウクと呼ばれる)からなる210日周期の民間暦のことである。ジャワやバリでは現在でも儀礼や占いのために用いられている。ウクにはそれぞれ名が付けられており、第1のウクがシクタ、第2のウクがランドゥップである。
- (82) インドネシア語版では Anwas となっているが、明らかに誤りなので、ジャワ語版に従って Anwar に訂正した。原文を補足して説明すると以下のとおりである。シスには2人の息子がおり、アワスがヌフに連なる系譜の祖になるのに対して、もう1人の息子がジャワの神々に連なる系譜の祖になる。この息子の名前は後代のジャワ語文献ではアンワルの名で知られるが、『カンダ』ではヌルチャヒヤと呼んでいる。
- (83) ここで「プリアイ」という表現を使っているのは、ジャワの土着の高位の神々という意味であろう。
- (84) 古ジャワ語と現代ジャワ語およびマレー語のラーマ物語については青山(1998)を参照。

参考文献(第7章に関する文献)

略語一覧

BKI	Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van het KITLV
Djåwå	Djawa, Tijdschrift van het Java-Instituut (Jogjakarta)
KITLV	Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde
VBG	Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen
VKI	Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde

A. Samad Ahmad. 1987. *Hikayat Amir Hamzah*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

青山亨. 1994. 「叙事詩、年代記、予言: 古典ジャワ文学に見られる伝統的歴史観」『東南

- アジア研究』32(1): 34–65.
- . 1998 「インドネシアにおけるラーマ物語の受容と伝承」 金子量重・坂田貞二・鈴木正崇（編）『ラーマヤナの宇宙：伝承と民族造型』pp. 140–164, 東京：春秋社.
- Doorenbos, J. 1933. *De Geschriften van Hamzah Pansoeri*. Leiden. Thesis.
- Drewes, G. W. J. 1927. 'Het document uit den brandstapel,' *Djâwâ* 7: 97–109.
- . 1954. *Een Javaanse primbon uit de zestiende eeuw*. Leiden: E. J. Brill.
- . 1968. 'Javanese poems dealing with or attributed to the saint of Bonañ,' *BKI* 124 (2): 209–240.
- . 1969. *The admonitions of Seh Bari*. Bibliotheca Indonesica 4. The Hague: Martinus Nijhoff.
- . 1977. *Directions for travellers on mystic path: Zakariyyā' al-Anṣārī's Kitāb Faḥ al-Raḥmān and its Indonesian adaptations, with an appendix on Palembang manuscripts and authors*. VKI 81. The Hague: Martinus Nijhoff.
- . 1978. *An early Javanese code of Muslim ethics*. Bibliotheca Indonesica 18. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Drewes, G. W. J. and L. F. Brakel. 1986. *The Poems of Hamzah Fansuri*. Bibliotheca Indonesica 26. Leiden: KITLV.
- Edi Sedyawati, I Kuntara Wiryamartana, Sapardi Djoko Damono and Sri Sukesu Adiwimarta. 2001. *Sastra Jawa: Suatu Tinjauan Umum*. Jakarta: Pusat Bahasa, Balai Pustaka.
- Florida, Nancy. 1995. *Writing the Past, Inscribing the Future: History as Prophecy in Colonial Java*. Durham and London: Duke University Press.
- 深見純生. 2012. 「[翻訳] ババッド・タナ・ジャウイ (1)」『国際文化論集』45: 145–163.
- Graaf, H. J. de and Th. Pigeaud. 1974. *De eerste Moslimse Vorstendommen op Java*. VKI 69. The Hague.
- Gunning, J. G. H. 1881. *Een Javaansch geschrift uit de 16de eeuw handelende over den Mammedaanschen godsdienst*. Leiden: E. J. Brill.
- Hollander, J. J. de. 1852. *Manik Maja, Een Javaansch gedicht (tembang)*. VBG 24.
- . 1865. *Manik Maja*. 2nd ed. Batavia.
- Johns, A. H. 1965. *The gift addressed to the spirit of the Prophet*. Canberra: Oriental Monograph

Series no. 1, Centre of Oriental Studies, The Australian National University.

- Kraemer, H. 1921. *Een Javaansche primbon uit de zestiende eeuw*. Leiden.
- Pigeaud, Th. G. Th. 1967–70. *Lieterature of Java*. 3 vols. Thage Hague: Martinus Nyhoff.
- Poerbatjaraka, R. M. Ng. 1938. De geheime leer van Soenan Bonang (Soeloek Woedjil). *Djåwå* 18: 145–181.
- . 1940. *Ménak*. Beschrijving der Handschriften. Bandoeng: A. C. Nix.
- Ricci, Ronit. 2011. *Islam Translated: Literature, Conversion, and the Arabic Cosmopolis of South and Southeast Asia*. Chicago: The Universtiy of Chicago Press.
- Ricklefs, Merle C. 1998. ‘Islamising Java: The Long Shadow of Sultan Agung,’ *Archipel* 56: 469–482.
- Ronkel, Ph. S. van. 1895. *De Roman van Amir Hamza*. Leiden: E. J. Brill.
- Schrieke, B. J. O. 1916. *Het boek van Bonang*. Utrecht. Thesis.
- 豊田和規. 2017「ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』(その1)」『東京外大 東南アジア学』22: 73-116.
- Uhlenbeck, E. M. *A Critical Survey of Studies on the Languages of Java and Madura*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Van Ronkel, Ph. S. 1895. *De Roman van Amir Hamza*. Leiden: E. J. Brill.
- Wilkins, J. A. 1851. *Séwåká: Een Javaansch gedicht, met eene inleiding, woordenboek en vertaling*. Zaltbommel.
- Zoetmulder, P. J. 1994. *Pantheism and Monism in Javanese Suluk Literature: Islamic and Indian Mysticism in an Indonesian Setting*. Org. 1935 in Dutch. Leiden: KITLV Press.